

# KULIC

# 13

1980. 10

慶應義塾大学研究・教育情報センター

# KULIC 13

## 目 次

### 情報センター10年の歩み

1.....	情報センター発足からの10年間	高 鳥 正 夫
10.....	情報センターの機械化：過去から現在まで	安 西 郁 夫
13.....	歩を休めて眺める時	松 原 秀 一
15.....	内部からみた日吉情報センターの変遷	宮 入 暁 子
18.....	医学情報センター最初の10年	佐 藤 和 貴
21.....	理工学情報センター寸感	下 郷 太 郎

23.....	NLS磁気テープについて〈ティールーム〉	佐 野 陽 子
24.....	レファレンス500日〈スタッフルーム〉	市 古 健 次
25.....	経営管理研究科図書館の現状と将来像	鈴 木 貞 彦
26.....	目録の将来	渋 川 雅 俊

\* \* \* \* \*

### 資 料

36.....	年次統計要覧〈昭和54年度〉
---------	----------------

40.....	編集後記	〈表紙〉 孫福 弘	〈カット〉 日下部寿子
---------	------	-----------	-------------

# 情報センター発足からの10年間

高鳥正夫

(研究・教育情報センター所長)



## はしがき

義塾における研究，教育に必要な学術情報の効率的な提供を目指して，昭和45年に発足した研究・教育情報センターは，今年で丁度10年の歴史をもつこととなった。この10年の間，情報センターの内外にはいろいろの出来事があったし，また，その準備期間から発足期にかけての難しい人間関係，不十分な図書館施設のなかでのサービスの工夫，図書費の増加に伴う収書，整理業務の遅れの克服など，外部からは見落され勝ちな情報センター職員の努力の積み重ねもあった。そこで，情報センター発足いらい，引続いてその運営と図書館サービスの提供に関係したメンバーの一人として，この間における情報センターの活動や主な出来事をふり返ってみたい。なお，情報センターにおける整理業務のあり方については，渋川雅俊課長の執筆する別稿を参照されたい。

情報センターの担当するサービスは，大学にとってきわめて重要なものであることはいうまでもないが，同時にそれは息の長い仕事でもある。従って，情報センターが今後もその活動を活発に展開していくためには，これまで一緒に歩んできた多くの職員と共に，毎年新しく情報センターに加わる人々に期待するところが大きい。私共は今後の施設の拡充，図書資料の検索手段のあり方などを考えるときには，ほぼ20年先を見通して考えようと努めてきた。これから情報センターの運営やサービスに当る職員も，今後起りうるいろいろの問題を協力して切抜け，私共と同じように，明るい未来を見つめて進んでいくものと信じている。

## 1. 研究・教育情報センターの発足

義塾における研究，教育に必要な図書資料は，情報センターの発足以前においては，図書館，研究室，研究所などによって個別に管理，運営されてきた。けれども，学問研究が特定の分野の比較的狭い研究と同時に，新しい学際的な研究が盛んになってきたことと，各機関に個別に所蔵されている図書資料が増加するに従って，その利用に支障を生ずることが多くなってきた。そこで，全塾的な立場から必要な調整を行って，より高度のサービスを効率的に提供していくことが要望された。

このような要望に応じて，昭和42年1月に研究・教育情報センター委員会が設けられ，翌昭和43年12月に「慶應義塾研究・教育情報センター計画」及び「三田情報センター計画」が作成された。ここでは，従来の図書館，研究室などの組織を再編成して，新たに研究・教育情報センターという包括的な機構を設け，義塾の研究，教育を積極的に支援する体制を確立すべきであるとの基本構想のもとに，具体的な情報センター設立のためのプランが明示された。

この計画に従って，昭和44年4月に情報センター準備事務室が設置され，昭和45年4月に研究・教育情報センターの基本的な本部組織と，その支部組織である三田情報センターがまず発足した。その後，各支部センター発足のための準備が進んで，昭和46年4月には医学情報センターが，昭和47年4月には日吉情報センターと理工学情報センターが発足し，すべての支部センターが揃うこととなった。

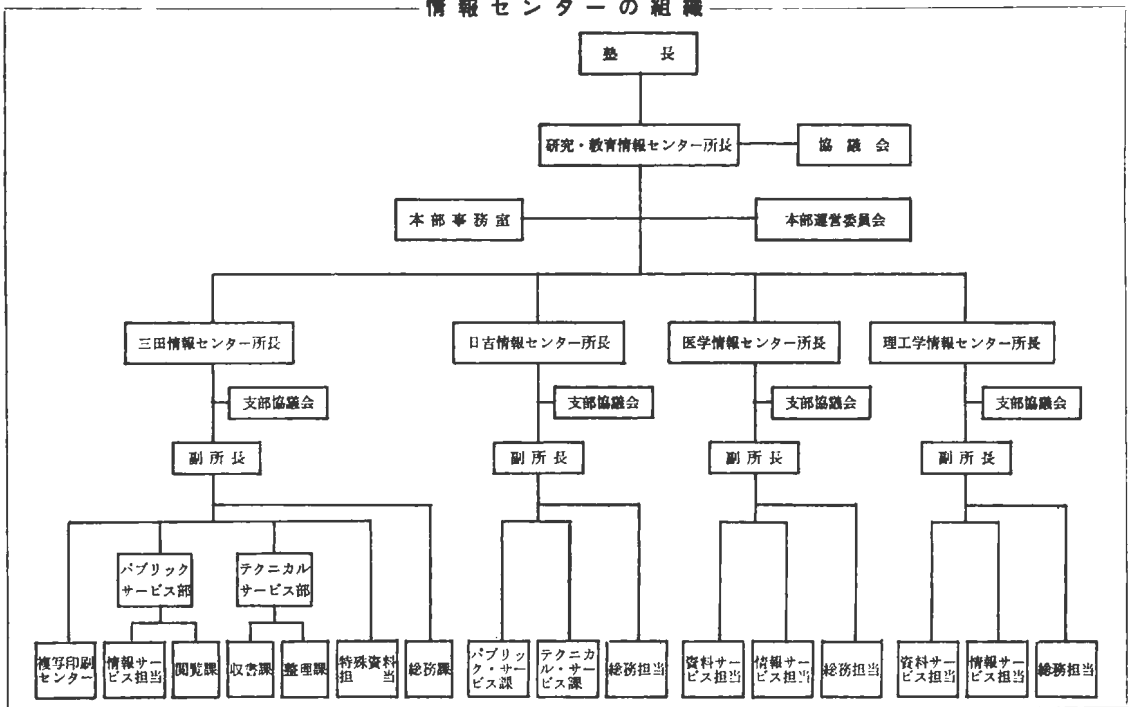
研究・教育情報センターという名称は、前述したように、従来の図書館、研究室などの図書資料を包括的に管理し、運用するという趣旨で名づけられたものである。ただ、各支部センターのもつ特殊事情のために、ある地区ではこの名称が比較的容易に受け入れられたが、一般にはその名称は分り難いという評判であった。特に伝統のある図書館については、図書館という名称を施設名としてだけでなく、組織の名称としても残すべきだという強い意見があった反面、情報センターになると図書館はなくなるはずだという反対論もあった。こうした議論の対立を静め、また、他大学にも分り易い名称を残す必要もあったので、三田については三田情報センターのほかに、慶應義塾図書館という組織を形式的に残すこととした。ただ、発足当時は珍しかった情報センターという名称も最近では各方面で盛んに用いられているので、この名称をそのまま維持すべきかどうかは将来検討すべき課題の一つであろう。

## 2. 情報センター組織の特色

情報センターの組織は本部組織と支部組織とに分けることができる。義塾の場合は大学のキャンパスが四つに分れており、それぞれのキャンパスに図書館がある。そこで、四つの図書館を中心に四つの支部センターを設け、また、各センター相互の関係または全体にわたる問題を検討し調整するために本部をおくこととした。

本部組織としては、情報センター所長のもとに本部事務室をおき、情報センター業務の全般的調整、特に四つの支部センターにわたる人事、図書予算の立案のほか、企画、調査などを担当するものとした。従来の図書館組織においても同様の機能は要求されたが、情報センター組織においてはこの機能を重視して、本部事務室を独立した機構とした。また、本部と各支部センター相互の間の連絡機関として本部運営委員会を設けた。情報センターの最高の審議機関としては、学部長などの各学部代表、及び、これに属さない大学院研究科代表などのほか、各支部センターの所長と副所長

情報センターの組織



をもって構成する情報センター協議会がある。この全学的な規模の協議会は毎年二回定期的に開催され、情報センター運営の基本方針などを審議するほか、情報センター所長、支部センター所長の候補者の推薦を行うものである。

支部センターは三田、日吉、医学部、工学部におかれ、それぞれ支部センター所長、副所長のもとに必要な事務組織を設けている。この事務組織は従来の部、課制を基本としながら、その業務の性質や規模に応じて新しく担当制度を定め、たとえば情報サービス担当、特殊資料担当、資料サービス担当などとした。また、各地区には支部センター協議会があり、支部センターの運営の基本方針その他が審議されるが、その構成員は各地区の特殊性に応じて異なっている。

こうした情報センター組織は、他の大学図書館の場合と基本的には変りはない。ただ、情報センター職員の地位と能力に注目して、情報センター協議会には職員である副所長を構成員に加え、また、支部センター協議会には副所長及びこれを補佐する職位にある者を参加させ、情報センターの運営について権限と責任をもたせている点は大きな特色といえる。今後も義塾の情報センターは、サービスの利用者である教員とその提供者である職員との信頼と協力に基づいて、その使命を完うしていくものと信じている。

### 3. 情報センターにおけるサービスの展開

#### 1) 閲覧利用サービス

情報センターが担当する図書館サービスは、研究者である教員に対して行うサービスと、大学院学生、学部学生に対するサービスとに分けることができる。特に、三田と日吉のキャンパスには、それぞれ1万名に近い学生が通学しているから、学生のための図書館サービスをどのように改善していくかは、情報センターにとって大きな課題であることはいうまでもない。

昭和45年に情報センターが発足するに当って、

三田では、各学部から研究室書庫の管理が情報センターに委ねられた。その際、従来から研究室書庫の図書資料を大学院学生にも利用させて欲しいという声があったので、情報センターでは各学部の了解をえて大学院学生の入庫利用を認めることとした。この方針は現在まで引継がれており、大学院学生に大きな使宜を与えている。また、図書館利用者の使い易さを考えて、昭和46年には図書館の改造と図書の大規模な入れ替えを行い、利用度の高い約18万冊を第3書庫の1、2層に移し、開架式に切り変えた。更に、レファレンス・ルームを従来の2倍以上のスペースに拡げ、大学の総合図書館として必要なサービスを提供してきた。

日吉の藤山記念図書館は三田の図書館よりも遙かに狭く、その利用にも種々の障害があったので、数年間の準備段階を経て、昭和51年から全館を開放して、学生が図書資料に容易に近づいて利用できる全面開架制にふみ切った。また、教養課程における学生の図書利用の実態に注目して、蔵書の年代別配架を計画し、昭和40年以降の図書資料を最も使い易い二階書庫に集中し、学生の90%の利用をそこで受止めることとした。

#### 2) 収書整理サービス

情報センターが充実したサービスを行っていくためには、研究者の購入希望に応えられるだけの図書費をもつことが必要である。そこで情報センターの発足いらい、各支部センターを含む全体の図書費については、情報センター本部で予算折衝を行うこととした。幸い、歴代の財務担当理事の理解と協力のもとに、昭和45年度には1億1千万円だった図書費が、昭和54年度には5億4千万円となり、他大学にも例を見ない大きな伸びを示してきた。

情報センターでは、発足いらい機械化計画を推進してきたが、図書予算を管理するB I C Cシステムに続いて、4つの支部センターを中心に、学内諸機関が所蔵する逐次刊行物に関する情報をコンピュータによって管理するP I C Cシステムを

開発し、昭和46年には継続受入雑誌のユニオン・リストを作成して関係諸機関に配布した。その後、研究者の要望に応じて、「慶應義塾大学継続受入雑誌所在目録予備版」を印刷刊行して研究者に配布したが、その詳細については安西郁夫副所長の執筆する別稿を参照されたい。

a) 三田情報センター

情報センターの発足前においては、書店から見計いで持ち込まれる図書資料について、図書館と研究室とが別個に選書を行っていた。そのため図書館と研究室との間の相互の協力や調整が実際には難しかったのみでなく、書店にとっても購入決定が大幅に遅れるという難点があった。そこで情報センターの発足を契機に、新しく選書室を設けて、毎月1回書店から持ち込まれる和漢書、洋書千冊ないし2千冊を分類配架して展示し、一週間ほどの間に学部と図書館とが個人単位でまたは図書委員会などを開催して、一緒に選書を行うこととした。大学の研究、教育に必要な図書資料を収集する場合には、主題に明るい研究者と、過去の蔵書や書誌の利用に詳しい図書館員との協力が不可欠であるが、前述した選書方式を採用したことによって、次第にその協力体制が強固なものとなってきた。

こうした協力体制は高額ものの購入の面にも現われており、図書費の少なかった初期において

は、数名の研究者が研究費を持ちより、そこに図書館は図書費を足して協力して高額ものを購入することができた。三田情報センターでは、また、専任の取書担当者をおいて、歴代の図書館長の取書方針を考慮しながら、図書館と学部との間の図書資料の収集について連絡調整を行い、昭和45年から第一次取書計画を立案し、次いで昭和48年から第二次取書計画を立てて、計画的取書を行ってきた。そして、英国議会資料 (Blue Books) Caxton, Chronicles of England (初版)、弥兵衛鼠に代表される一連の奈良絵本などの貴重な図書資料を収集することができた。次に昭和54年には、合同目録への研究室著者名カードの繰り込みを完了して利用者の便宜をはかり、また、図書館旧分類の和洋カード目録をマイクロフィルムに収め、それを冊子体に印刷した「慶應義塾図書館分類目録」全12巻を発行した。

b) 日吉、医学、理工学情報センター

日吉情報センターでは、発足当初から教員に学生用図書の推薦を求めてその整備をはかっており、図書費の増額を背景に幅広く学術書、教養書を収集しているが、昭和51年には工学部工学基礎教室の協力をえて、自然科学、工学部門の蔵書の充実をはかった。また、図書館と研究室とが離れているため、研究室側で図書館蔵書を検索できるように、研究室の閲覧用目録に藤山記念図書館の

情報センター図書費 (図書館・学部) の推移

年度	金額 千円	対前年度比 %	昭和45年を 100とする 指数
昭和45年度	115,324	—	100
“ 46 “	127,238	10	110
“ 47 “	137,778	8	119
“ 48 “	153,110	11	133
“ 49 “	174,850	11	152
“ 50 “	211,252	21	183
“ 51 “	279,776	32	243
“ 52 “	343,352	23	298
“ 53 “	428,234	25	371
“ 54 “	544,021	27	471

(図書資料費を含み特別図書費を除く)

情報センター図書冊数 (図書館・学部) の推移

	単行本	製本雑誌	合計
昭和45年度	880,617	177,619	1,058,236
“ 46 “	792,016	266,379	1,058,395
“ 47 “	826,591	283,429	1,110,020
“ 48 “	857,003	301,824	1,158,827
“ 49 “	888,370	323,203	1,211,573
“ 50 “	914,487	346,844	1,261,331
“ 51 “	948,267	364,810	1,313,077
“ 52 “	988,676	367,729	1,356,405
“ 53 “	1,039,116	397,641	1,436,757
“ 54 “	1,096,717	417,243	1,513,960

基本カードの繰り込みを実施した。

医学情報センター、理工学情報センターにおいては、従来、雑誌資料の購入に図書費の大半が当てられたため、単行書の新規購入までは手がまわらないのが実情であった。けれども、図書費の増加に伴って多少の余裕が生じたので、医学情報センターでは昭和52年から学生用図書の充実のための調査を行い、それに基づいて図書を購入した。また、昭和46年に医学情報センター所蔵の洋雑誌について、コンピュータによって「外国医学雑誌所蔵目録」を作成し、昭和48年には北里記念医学図書館所蔵の古医書について「古医書目録」を刊行した。理工学情報センターにおいても、昭和52年から学生用図書の購入を開始し、その後も引続いてその充実をはかっている。また、関係者の待望久しかった Beilstein, Handbuch der organischen Chemie, Gmelin, Handbuch der anorganischen Chemie を購入整備することができた。更に研究者の利用の便宜を考えて、昭和46年に「松下記念図書館学術雑誌目録」を作成し、また、その後の追加分を加えて最近では同77年版を刊行した。

情報センターにおいては、学術情報に対する需要が多様化してきたことなどの事情から、図書館業務の機械化を進めているが、三田情報センターではアメリカ議会図書館の蔵書に関するMARCデータを、端末装置によって引出し利用しており、医学情報センターではJICSTの科学、技術の分野を対象とするデータベースを利用する組織を有している。また、昭和55年からは三田と日吉の情報センターの間をファクシミリで結び、必要な資料を随時送りまたは受入れているが、今後は、四つのセンターの間を結ぶ計画を有している。

#### 4. 松下記念図書館の完成

工学部の日吉矢上台への移転が完了したのは昭和47年11月であるが、小金井にいた時代の工学図書館はその施設がきわめて貧弱で、基本的なサービスを提供することさえ困難であった。そのため

矢上台へ移転する場合には、十分なスペースと優れた設備をもつ図書館を建設することは、工学図書館関係者の悲願でもあった。そこで、かねてから私学振興に思いを寄せられる松下電器産業株式会社の会長松下幸之助氏より、工学図書館の建設費用を寄附する用意のある旨が伝えられたときには、義塾は深い感謝の気持をもって受入れることとなり、ここに義塾の図書館のうちでも最も近代的な設備をもつ工学図書館の建設に着手することができた。

この図書館は寄附者の好意に報いるため松下記念図書館と名づけられたが、工事も順調に進んで昭和46年8月末に完成し、同年9月28日に竣工式が行われた。矢上台正面の坂道を上ると、向って右手の丘の上に3階建の煉瓦模様の美しい姿を見せるこの図書館は、延床面積約2,290m<sup>2</sup> (694坪)で、1、2階に書庫、各種資料室、閲覧室、事務室などを配置し、3階には会議室が設けられている。小金井時代の工学図書館に比較すると、閲覧座席数は270席で約3倍となり、書架収蔵力も8万8千冊で約4倍に増加した。このように工学部にも新しい図書館が完成し、図書館サービスを円滑に提供できる条件が整備されてきたので、昭和47年4月から理工学情報センターとして、研究・教育情報センターの支部組織に加わることとなった。

昭和54年度末の統計によると、理工学情報センターの所蔵冊数は単行書3万7千冊、製本雑誌9万冊にのぼっており、また、図書購入費の面を見ても、矢上台に移転直後のそれと昭和54年度の予算を比較すると、実に約8倍となってきた。その上、昭和49年4月の数理工学科の開設、近い将来に予定される理工学部の発足のための準備などの諸事情も加わって、新設当時はしばらくもつと思われた図書館書庫はいっぱいになり、既に閲覧座席の一部を廃止してそこに書架をおいている実情であり、書庫の増設が当面の課題となってきた。

## 5. 国際医学情報センターの独立

医学部の北里記念医学図書館においては、昭和30年代に早くも文献調査係において情報サービスを行ってきたが、昭和40年代に入ってからMEDLARS(米国国立医学図書館)、INIS(国際原子力情報センター)、APTIC(米国大気汚染技術情報センター)などとの間に活発な国際協力を行ってきた。けれども、これらの情報サービスが飛躍的に拡大するにつれて、医学図書館の組織や施設では限界に達すると共に、複写サービスのための人員がきわめて多数となり、そこに複雑な問題が生ずるおそれもあった。そこで、医学、医療関係の情報提供を引続いて円滑に実施していくため、医学部関係者の協力と理解のもとに、医学情報センターの情報活動の一部を分離することとし、昭和47年4月に財団法人国際医学情報センターが発足した。

国際医学情報センターは医学部の医学情報センターから独立することによって、その情報サービスの内容も明確化され、職員の身分も財団との間で明確となり、特に複写担当者の立場も安定するという利点があった。その反面、国際医学情報センターの職員の中心部分は、北里記念医学図書館の時代からの経験と能力をもった職員であり、また、その情報活動は従来どおり医学情報センター所蔵の雑誌資料に依存しており、その施設の一部を賃借するという形態をとっている。そこで、国際医学情報センターと医学情報センター、医学部などとの関係を円滑にするため、義塾から国際医学情報センターに理事、監事を派遣し、また必要な職員を外向させるなどして、その健全な発展を見守っている。

国際医学情報センターが独立した財団法人として運営される場合に重要な点は、その運営方法とサービスについて、個々の医学図書館ではもちえない独自性を有するように努力することと、財政的な基盤を固めるということであろう。この二つの要請を実際に調和させるのは容易なことではない。特に国際医学情報センターの独立後、医学、

薬学などの分野における情報要求は日増しに増大したため、情報サービスを提供する相手方の点で競合する機関も現われてきている。そこで国際医学情報センターが、その情報サービスの質的向上をはかりながら事業を発展させるためには、一段の創意工夫が要請されるところにきている。

## 6. 「慶應義塾図書館史」の刊行

三田山上に赤煉瓦で八角塔をもつ図書館が建設されたのは明治45年のことであるが、それ以来、図書館が義塾における学問研究と教育に果たした役割はきわめて大きなものである。昭和20年代の終りになって研究室の図書資料が急速に整備されてきたので、その後は図書館は研究室と相補いながら、研究者や学生に必要な学術情報を提供してきた。そして、昭和45年には新しく研究・教育情報センターが発足し、図書館は研究室と共に三田情報センターの組織のうちに含まれることとなった。

この昭和45年の組織変えを一つの区切りとして、それまでの図書館の歴史を顧みることは重要なことであるが、「慶應義塾百年史」を読み返しても、大学の心臓ともいべき図書館に関する記事は比較的少ない。図書館の蔵書のうちには、福澤先生がアメリカで購入して持ち帰ったものや、先生の在世当時に学生に貸出した図書も含まれている。また、篤志家からの図書の寄贈は相次いだし、図書館員の長い間の努力によって形づくられたコレクションもある。そこで、図書館の歴史や蔵書の内容を明らかにして、義塾の学問発達の姿を書き残すことを計画し、当時最も古参の館員であった伊東弥之助君にその執筆を依頼した。

伊東は幼稚舎から義塾に学び昭和6年に経済学部を卒業し、故野村兼太郎博士のお弟子さんで近世社会史に造詣が深く、同時に、図書館のことを実によく知っていた。この仕事に着手したとき、伊東は三田情報センターのテクニカル・サービス部長の要職にあったが、業務の余暇を使って資料を探索し、古老の記憶を書き留めながら、比較的



短期間にA5判348頁の「慶應義塾図書館史」をまとめた。

義塾の歴史を書いたものとしては、学制や施設の変遷に重点をおいた「慶應義塾百年史」がある。これに対して、「慶應義塾図書館史」は義塾の学問を図書館の内側から眺め、図書館の成立、発展に貢献した人々の努力を中心にやや読物風にまとめてあり、登場人物も実に生き生きしている。「慶應義塾図書館史」は三田評論の新刊紹介記事のなかでも、近頃塾内ででた異色の好著とほめられており、また、図書館における長年の伊東の努力と貢献に対して、昭和47年には福澤基金による義塾賞が授与された。義塾に親愛の情をもつためにも、本書を一読されることをすすめたい。

## 7. 私立大学図書館協会の常任理事校

私立大学図書館の大部分である248校の大学図書館は、現在、私立大学図書館協会という組織に属して、毎年一回総大会を開催するほか、全国的規模または地域ごとに研究会を開催して、私立大学図書館の改善発展をはかっている。この組織の代表校が常任理事校であって、2年を任期として、交替で世話役を務めることとなっている。同様の組織としては国立大学図書館協議会、公立大学図書館協議会があるが、その加盟図書館は前者では76校、後者では33校であるから、私立大学図書館協会ははるかに大きな世帯である。

これだけの大きな組織となると、常任理事校の仕事も担当の量に達するので、ある程度の規模の大学図書館でないと、常任理事校となってお世話するのが難しいというのが実情である。義塾の場合には、昭和34年から35年にかけて、高村象平館長のときに常任理事校を引受けたただけであったので、やがて常任理事校を引受けて欲しいという要望が早くから協会内部にあった。けれども、研究・教育情報センターへの大きな組織変えがあるので、もう少し先へいってからとお断りしてきたが、昭和45年には情報センターも発足して断る理由もなくなったので、昭和48年と49年の2年間、

この常任理事校を引受けることとなった。

情報センターの発足に伴い、学内には図書館サービスの改善を求める声が一層高くなった時期に、この常任理事校の仕事を引き受けたため、実際にその仕事を担当した職員スタッフは大変忙しい思いをしたことと思っている。常任理事校の活動としては、昭和48年度夏に東洋大学において第34回の総大会、研究会を開催し、昭和49年夏には駒沢大学において第35回の総大会、研究会を開催した。このほか、東地区部会の理事校も兼ねたので、協会本部の役員会、地区部会の役員会、研究会などに出席するため各地に出張し、また、文部省、国会図書館などとの連絡も行った。そして2年後に、常任理事校の仕事に関西大学図書館に渡して交替した。

## 8. 図書館スタンドグラスの復元

慶應義塾図書館のスタンドグラスは、図書館が義塾創立50年を記念して明治45年に建てられた後、洋画家和田英作氏の原画に基いて小川三知氏が制作したものであるが、第二次大戦末期の昭和20年5月に、戦火によって図書館と共に焼け落ちてしまった。義塾は戦後いち早く図書館を復興したが、当時はスタンドグラスの材料も入手できなかったため、そこには素通しのガラスが入れられていた。

このスタンドグラスの原画は、封建の扉を開いて旭日の光と共に西欧文明のシンボルである女神がペンを手に入ってくると、ミリタリズムの象徴である鎧武者が白馬から降りて迎えるものである。スタンドグラスの下部にはラテン文で「ペンは剣よりも強し」とあり、その左右に、義塾創立の年と50年記念の年がローマ数字で記されている。この原画に基いて小川が作成したスタンドグラスは、高さ6メートルあまり幅2メートル半という大きさからいっても、また、その技巧からいっても抜群の出来栄で、大学図書館にふさわしい雰囲気をかもし出していた。

小川三知氏のもとでスタンドグラスの技法を習

得した大竹竜蔵氏が、師の代表作品が戦火で崩れ落ちたままになっているのを知り、その復元を思い立ったのは昭和46年秋のことで、大竹は既に75歳であった。大竹は小川が使用したスタンドグラスをアメリカとイタリアから輸入し、小川が用いた技法をそのまま使い、3年という長い制作期間をかけて、昭和49年秋には完成に近づいた。

そこで昭和49年10月9日に、ほとんど出来上がったスタンドグラスの色調を試すため、その一部を工場から運んで実際にはめこんで見る作業が行われた。その夜、この作業のために出かけた門弟達の報告をきいて、大竹はスタンドグラスの色彩など、作業上の指示を克明に与えたという。その翌日、10月10日に大竹は忽然と逝った。時に78歳であった。スタンドグラスの除幕式は、その2か月後の昭和49年12月10日に行われた。このスタンドグラスが熟に学ぶ人々に、いつまでも美しい思い出を残すことを期待している。

## 9. 文学部図書館・情報学科との協力

三田に新図書館を建設する計画が具体化するにつれて、従来、西校舎におかれてきた図書館・情報学科の研究室、図書室などを移転するかどうか、移転するとしてどこの施設に収容するかが問題となった。そこで、図書館・情報学科と、文学部、情報センターなどの関係者が協議した結果、学科の施設のうち研究室に相当する部分は現在4学部の入っている研究室に移転し、図書室は新図書館5階に図書館・情報学資料室として収容することとなった。

図書館・情報学科は、昭和26年にアメリカ政府の資金援助を受けて開設され、その後、昭和42年には大学院修士課程が、昭和50年には同博士課程が設置されている。情報センターは毎年図書館・情報学科から数名の卒業生を受入れているほか、職員の再教育のための施設として利用する便宜が与えられている。従って、今後も学科から優秀な卒業生が引続いて送り込まれれば、情報センターの業務の内容は次第に向上していくものと期待さ

れる。

他方、図書館・情報学科もその対象とする学問の性質上、実務との密接な関連性が要請されており、大学図書館はその実験室としての役割を有している。従って、図書館・情報学科は情報センターの運営とサービスの改善に大きな関心を示すと同時に、毎年、教育のためのデータと実務上の経験をもつセンター職員数名を招へいして、講師として教育に当らせている。このように学科と情報センターとは、教育と実務を直結させられるという恵まれた環境をもつものであるから、そのために生ずる小さなトラブルを越えて、両者が密接に協力していくことが重要であろう。

## 10. 三田の新図書館の建設

明治45年に、義塾創立50年を記念して建設された慶應義塾図書館も既にほぼ70年を経過したため、その施設は大きさの点でも機能の点でも、現在の義塾における研究、教育上の要請に応えるには不十分なものとなってきた。そのため、昭和51年夏には、情報センターでは具体的に新図書館の基本的な問題点を検討し、新図書館建設の必要性を各方面に訴えたところ、幸いにも、同年末に久野塾長のもとに新図書館建設のための委員会が設けられた。その後、昭和52年5月には塾長の交替があったが、新しく就任した石川塾長もこの計画を更に進められ、新図書館の設計を楨総合計画事務所代表楨文彦氏に依頼することとなり、昭和54年5月には基本設計が出来上がった。

新図書館は現在の図書館と向い合った第2校舎をとり壊して建設されるが、延床面積は15,193m<sup>2</sup>（約4,596坪）、地下5階、地上7階で全館冷暖房設備をもつ近代的な大学図書館である。新図書館の図書収容能力は約115万冊、閲覧座席数は約1,100席を予定しているから、現在の図書館のおよそ倍の規模のものとなる。図書館機能の配置上の特色をあげると、1階にはレファレンス・ルーム、目録ホール、選書室、複写印刷センターとこれに関連する事務室をおき、2階には学習用図書

を書架に備えた閲覧室を設けた。3階と4階は人文、社会科学関係の雑誌センターとし、3階には図書館と文学部、大学院社会学研究科の雑誌をおき、4階には経商資料室と法学資料室の雑誌資料をおくこととなった。

5階には図書館・情報学資料室、情報処理室、貴重書室などを設け、6階には収書、整理、総務の各事務室、所長室、本部事務室などをおくこととした。他方、地下1階と2階は比較的利用度の大きい図書を収容する開架式書庫とし、また、新しくAVホール、視聴覚室を設けることとした。地下3階以下は閉架式書庫とし、雑誌資料、図書を収容する予定である。要するに全体としては、利用者の便宜を考えながら、その数では多い学生の利用を地下2階から地上3階までとし、それ以外の階層を教員その他の研究者が利用するように振り分けた。

このような内容と規模の新図書館が、いよいよ昭和56年12月には完成することとなり、これによって研究、教育に必要な文献情報を提供するための条件は、施設面では著しく改善される。大学が十分なスペースと優れた施設を備える図書館をもつことができるか否かは、図書館関係者のみでなく、その大学の教職員、理事者のすべてが高い学問的水準と大学の将来を見つめる見識をもつかどうかにかかっていることを強く感じながら、建設工事の順調な進行を念願している。

(参考文献) 本文に関連のある主な論稿は次のとおりである。

1. 高鳥正夫「研究・教育情報センターの発足」大学報25号4頁、同「情報センター2年目を迎えて」KULIC2号1頁、三沢進「日吉情報センターの構成と運営」KULIC3号13頁、外山敏夫「医学情報センターの立場」KULIC1号14頁、中島紘一「理工学情報センターの発足」KULIC4号19頁。
3. 高鳥正夫「大学区書館の収書計画と慶應義塾図書館」KULIC1号23頁、柳屋良博「収書方針に影響を及ぼす諸要因」KULIC1号24頁、「三田情報センターの収書方針と第二次収書計画(昭和48—50年度)」、渋川雅俊「慶應義塾大学三田情報センターにおける選書と受入業務」図書館雑誌66巻9号435頁、同「図書の値上りと義塾の図書費」KULIC6号26頁、安西郁夫「学生の図書館利用の一断面」KULIC2号4頁、関洋「日吉情報センター藤山図書館利用の一断面」KULIC6号26頁、天野善雄「日吉情報センター(藤山記念図書館)の改装計画」KULIC11号23頁、関洋「蔵書の年代別配架の背景—日吉情報センター(藤山記念図書館)の方向」KULIC12号43頁。
4. 「慶應義塾大学工学部三十五年史」、トピックス「松下記念図書館の完成」KULIC3号16頁。
5. 津田良成「財団法人国際医学情報センターの発足にあたって」KULIC4号7頁、同「財団法人国際医学情報センターの発足」三田評論716号90頁。
6. 高鳥正夫「慶應義塾図書館史」の刊行」大学報44第14頁、吉田小五郎「懐しく美しい八角塔—新刊「慶應義塾図書館史」に寄せて」三田評論718号2頁、高村象平「慶應義塾図書館史」を読む」三田評論718号66頁。
8. 高鳥正夫「図書館スティンドグラスの復興」三田評論744号82頁、大竹勝弥「スティンドグラス完成の日に」三田評論744号84頁。
9. 中島紘一「情報センター職員の養成と図書館・情報学科」KULIC7号16頁、高鳥正夫「大学図書館の将来について」Library and Information Science 17号245頁。
10. 高鳥正夫「新図書館への期待」KULIC12号1頁、横文彦「設計者のねらい」KULIC12号4頁、中島紘一「新図書館のプランニング—準備段階から実施設計まで—」KULIC12号11頁、横文彦・高鳥正夫「構想なった新図書館」大学報107号4頁。

# 情報センターの機械化：過去から現在まで



安西郁夫  
(三田情報センター副所長)

## 1. IBM 7040 時代

研究・教育情報センターの昭和45年度開設に備えて、その前年度に同センター準備事務室が設置され、福留孝夫、孫福弘、渋川雅俊の三銃士がスタッフとして配属された。

研究・教育情報センターを構成する4センターのトップを切って45年4月に設立される三田情報センターのパブリック・サービス部の責任者に予定されていた筆者は、ある日準備事務室から業務機械化の相談を受けた。機械化の第一弾としてとりあげられたのは図書予算管理であり、その業務分析を担当していた孫福から詳細な説明があり、45年4月から稼働できるB I C C (Budget Information Control on Computer) システムの作成を依頼されたのである。

当時の塾にはIBM 1620(三田)とTOSBAC 3400(小金井)の2機種が存在していた。まず手近な1620を使う事を考えたが、このミニコンには印刷装置がなく、出力はパンチカードであった。そのパンチカードを会計機にかけて印字させることも考えては見たが、複雑なアウトプットは不可能と判断し、TOSBACの利用を考えた。遠隔の地にあるのが難点ではあったが、筆者が大学院で設計したMISAというシステムに使用した馴染の深い機種であった。だが問題が一つあった。1ワード24ビットのこの計算機が扱える整数は8桁までである。当時三田地区の図書予算額は8桁であったが、やがて9桁になることは明らかであった。この8桁の壁を破るために一種のトリックを思いつき、それに必要なサブルーチンア

センブリ言語で作成し、工学部計算室の小川昭易(現ソニー)に示したところ、最終的に僅小な誤差の出る可能性があるといわれ、筆者は袋小路に追い込まれてしまった。ちょうどその頃IBMが第一線を退いた7040を慶應・早稲田・青山の3大学に無償で貸与する話が進展し、塾は日吉地区に情報科学研究所を設置して受け入れることになった。かくして44年12月に7040/1401システムが搬入された。3400では使えなかったコボル言語が使えることがこのシステムの大きな魅力であった。

同機関連の委員会や勉強会に参加してシステムの特性の把握に努めると同時に、同機の英文コボル・マニュアルを入手して懸命に勉強した。筆者は夜1年間計算機学校に通ったことがあり、コボル言語も習ったが、重点はフォートラン言語に置かれ、コボルの実習は時間数も限られていたので、正直言ってコボルには自信がなかった。しかもB I C Cは会計処理の色彩が強く、情報検索を専攻してきた筆者には苦手な分野であった。苦勞しながらB I C Cの中核部分を短期間で作りあげ、45年4月三田情報センター赴任の際の手土産とした。

赴任後の筆者は図書館の大改革と労務問題の対応に追われ、暫くの間計算機から遠去かった。機械化要員の確保が当面の緊急課題であり、系主任以下の若手職員を順次情報科学研究所に送りこんで実地訓練を積ませた。一方、図書館・情報学専攻の大学院生渡部満彦(現医学情セ)を雇用し、B I C Cの拡張に当らせた。

そのための予算を持たないまま機械化に向って走り出した我々を苦しめたのは他ならぬ資金不足

である。たまたま経営情報開発協会が経営情報関連の電算化システムを公募したので、我々は研究会を組織し、図書予算管理、雑誌管理、図書受入管理、SDI等からなるKULICシステムの設計計画書を作成し、45年10月に応募した。全国の大学や研究機関から多数のグループが応募したが、我々のグループが見事入選の栄を勝ちとり、同年末に研究奨励金を授与された。当時のわが国では総合的なライブラリー・オートメーション・システムは物珍しかったようである。いずれにせよ、この奨励金は乾天の慈雨であり、機械化推進の原動力となった。

BICCに次ぐ第2弾として取り上げたのはPICCと呼ばれる雑誌管理システムであり、その第1段階では、4情報センターに諸研究所を加えた全学の継続受入雑誌の目録を作成することを目指し、45年9月に各センターからメンバーを出してプロジェクト・チームを編成し、具体的なシステム設計を始め、11月からはデータシートの記入を開始した。46年7月にはテストランを実施し、8月にはシステムを稼動させた。

PICCのプログラムは孫福や大学院生加藤徳義（現IBM）が主として手がけ、後に安田博や石川秀道が加わった。この頃高等学校事務室の梅戸健司が自費で熱心に計算機を使用していることを知り、定期人事異動で収書課に迎え、機械化プロジェクト・チームに加えた。

7040時代は、データカードを日吉まで運搬し、夜の時間帯を借り切って処理を行なった。PICCの全塾雑誌目録は、ページ数が多い上に部数も少なく、カーボン紙を挟んで3部ずつ印刷したが、カーボン紙の剝離とミシン目の切り離しに苦勞し、その作業はしばしば深夜にまで及んだ。

## 2. UNIVAC 1106 時代

計算機の目覚しい発達と計算機利用者の増加に対応すべく、塾は48年7月にUNIVAC1106を導入した。当時の私立大学では最大のシステムであり、三田の西校舎地下にはリモート・バッチ用

端末機としてOUK9300と1004が設置された。1004はカフェテリア方式で学生用に解放され、9300は研究用・事務処理用として使用されることになった。9300は記憶容量24KBの独立した計算機でもあり、その導入直後から筆者はコボルのテストを繰り返したが、その機能に厳しい限界のあることが判明し、以後は専ら1106の端末として使用することになった。

計算機の変更にはコンバージョン（変換）という厄介な作業がつきものである。データの場合は文字どおりの‘変換’であるが、プログラムの場合は‘書き直し’である。同じコボル言語であっても、7040と1106とでは水準が全く異なる上、計算機利用形態がオンサイト・バッチから専用通信回線によるリモート・バッチ方式に切り換えられたため、プログラム体系そのものを抜本的に見直さなければならなかった。

BICCは月次処理であり、毎月末の支払いに直結しているため、その改造を急がねばならなかった。渡部によって大きなプログラムにまとめられていたBICCは小単位に分割して書き直すことになり、梅戸、安田と筆者の3名が分担して間に合わせた。その後BICCは梅戸と安田によってその機能を拡張した。さらに、石川の日吉情報センターへの異動を機に、BICCの日吉版HBICCを石川が作成した。後に石川が計算センターへ転出してからは、山口日米男と関洋がそのメンテナンスを担当している。

PICCは筆者が全面的に改造し、新しい機能を追加した。一方、梅戸はAICCと呼ばれる図書受入管理システムの開発に48年9月から取り組んだ。これは継続出版物管理と重複調査を2本柱とするシステムであるが、教務事務機械化のリーダーとして梅戸が教務部へ転出して以降は安田の手によって補強された。

PICCの改造を終えた筆者は、館外貸出・館内閲覧の統計処理を目的とするCICCを開発し、49年度から稼動させた。

1106時代のハイライトはMICC（MARCI

テープ利用システム)の開発であろう。その中核は目録情報の検索と目録カードの作成であるが、困ったことに、UNIVACのラインプリンターには英小文字が無かった。我々はやむをえずユニパック社と共同で独自の library character set を開発し、英小文字が印刷できるようにした。プログラムの作成には、細野公男(図書館・情報学科)、安田と筆者が当たった。1106は1文字を6ビットで表現するため、1文字8ビットのASCIIコードをそのままでは扱えず、シフトコードの挿入を余儀なくされ、プログラムは非常に複雑なものとなった。後に1106はソフトウェアの改良でASCIIコボルが使用できるようになり、苦心の作も改造する破目となった。後に安田は大学院研修の一環としてTSS会話形式によるMARC検索システムを開発した。

### 3. FACOM—M180/160 時代

54年夏、塾の計管システムはFACOMに切り換えられ、日吉にはM180ⅡAD、三田にはM160が設置された。三田地区に専用機が置かれたことで処理スピードは著しく改善されたが、再度コンバージョンの憂き目を見ることになった。AICCとMICCは安田、BICCは風間茂彦、CICCは酒井明夫、PICCは筆者がプログラムの書き直しを担当した。

国会図書館が開発を進めていたJAPAN MARCは56年から正式に頒布される予定であり、我々はそれに備えて利用システムを開発しなければならないが、そのためにはなんとしても漢字処理装置を持たなければならない。幸いにも関係者の推進運動が効を奏して、55年秋に富士通の日本語処理システムJEFが導入されることになった。理在すでにJEFに関する講習会や勉強会が行なわれているが、日本語処理には特有の問題が少なくなく、JAPAN MARC関係システムの作成にはかなりのエネルギーを注がねばならないように思われる。

### 4. 研修と機械化の進路

情報センターは機械化に当って安易な外注方式を避け、プロジェクト・チームによるシステムの作成とメンテナンスを一貫して行なってきた。従って要員の養成は不可欠の急務であり、47年度から新規採用大卒男子職員に対して4月5月の午前中、筆者が中心になって本格的なコボル言語教育を実施することになり、48年度からは人事部の要請に応じて全塾の新入男子職員の研修を引き受けることになった。この研修は塾の新入職員研修の一部として位置づけられ、以後継続して実施されている。現在までに相当数の若い世代がこの研修を終え、塾内の事務機械化推進の大きな原動力となっている。この研修の実施は、情報センターにとっては大きな負担となっているが、受講者の範囲が拡大したとはいえ、情報化時代にふさわしく、電算機を有効な道具として駆使できる新しいタイプのライブラリアンの養成のためには避けられない負担であると筆者は思っている。

三田情報センターでは、アジア経済研究所のMARCデータベースを活用するため、同研究所と実験協定を結び、53年度末に整理課に端末を設置し、オンラインで目録情報を検索できるようにした。この実験に備えて、53年6月から半年間渡部を海外留学させ、OCLCで研修を受けさせた。また、医学情報センターは54年から、理工学情報センターは55年からJOISの端末を設置し、研究者に対するIRサービスを開始した。

現在4情報センターの若手職員がACSという研究グループを組織し、図書館業務のオンライン・トータル・システムを模索している。情報検索はいうに及ばず、ハウスキーピングの分野でも、カタログングを含めて、TSSによる本格的なオンライン処理に切り換えねばならない時期にきている。我々の悩みは、塾の現計算システムがそのようなニーズに応じえない所にある。

現在三田地区に建設中の新図書館の5階には、将来の必要性を考えて情報処理室を設けてあり、オンライン処理に備えて随所に同軸ケーブル用の

配管がなされる予定である。文部省が学術審議会の答申に応じて58年度に設立を企画している学術情報センターを中枢とする学術情報処理ネットワ

ークに対応するオンライン処理システムの構築こそが、情報センター機械化の今後の大きな課題であろう。

## ■ オピニオン・コメント・クリティック…

What is this life, if full of care  
we have no time to stand and stare.

### 歩を休めて眺める時

松原秀一  
(文学部教授/仏文学)



三田の図書館との付き合いもそろそろ30年になると言うのは怖ろしい。

玩物喪志と言う言葉が眼前にチラチラして来る。26年前副手に採用された時は書庫に出入り出来るのが無性に嬉しくて地下から屋根裏までよく歩き廻ったが最近では1時間以上は居ないことにしている。生来の雑書趣味から当面の主題に関係のない本に気を取られてしまうからである。もっとも昔のようにゆっくりブラウジングをする暇も無くなって来た。神田に行っても入る店は3、4軒に決まって来たし、金曜の10時前から古書会館前に並ぶことも無くなった。かつては行列で荒さんの前になるか後になるか予想しながら出掛けたものである。その荒正人さんも亡くなって数年になる。この30年間に図書館も随分変化したが私の方も年月と共に変わっているのである。今でも新任早々の人は館内を隅から隅まで歩いているであろう。

書庫の中を歩けるのは特権である。どこの図書館でも並んでいる本を眺める中にその図書館の歴史・蒐書傾向が見えてくる。古書店の棚と同じく各々その個性を備えているし、本を現物で覚えるのは書誌では得られぬ知識を与えてくれるものである。幕末からの洋学書は屋根裏の和本をぢかに

手にして知りプフィッツマイヤーやロニーの諸著作は言語文化研究所の市川文庫の現物で覚えたがこれは贅沢な学習でどこでも出来ることではない。昭和31年に留学した時 L. Wagner の仏語書誌 *Introduction à la linguistique française* に塾の架蔵をチェックして行ったことは KULIC の9号にも書いたが、Wの洋書を端から1冊づつ手に執って見てあったことは古書店に通った時に実に役に立った。昭和36年に帰国する際は Bossuat の中世仏文学書誌 *Manuel bibliographique de la littérature française du Moyen Age* を持ち帰り塾の所蔵図書の配架番号を欄外に書き込んだ。この書誌は仏文研究室にも一部買い同様に配架番号を記入することになっている。しかしこれを活用する上で大事なものは館内を歩いて所在をよく知ることだ。塾図書館のカードでは編者は必ずしも探っていないので作者が分明でないことも多い中世作品は検索し難いことがあるからである。大英博物館の写本に遺るロマンスのカタログは編者 Ward の名で識られている。この名で索いて見付からなかったのが北浦和の厨川先生の遺蔵書を借りて伺った。先生が科研費でこの本を買われたことを知っていたからである。この話を高宮君にすると架蔵されていると言う。“British Museum”でカードになっていた。架蔵されていることを知

っていけば色々索いて見たらろう。有無が解らぬ時はつい手数を省いてしまうのが悪いのだが、他方時間も無駄にしたいわけではない。

姉崎博士の『吉利支丹宗教学』は書庫の中で見た記憶があったが必要になった時カードを著者名で索いたが出てこない。書名カードで索いて見付けたが、ふと思いついて研究室との渡り廊下の所にあった旧著者名カードを索くとあり同時に『花つみ日記』等が架蔵されていることを知った。同時に姉崎正治『随筆、本』と言うカードがあり野村文庫から借りてみると、これは多くの学者の随筆集でたまたま姉崎氏が筆頭であるので著者として採られているのであった。尚、最近この旧著者別カードは研究室のユニオンに組込まれたので、検索はかなり楽になったのは有難い。この旧著者別カードボックスは度々場所が変り最後には閲覧室からレファレンス・ルームに行く間にあったが、カードボックスの移動が公示もなく行われて、誰も問題にしないのは天国的なのか地獄的なのか、フランスでは考えられまい。塾報にでも載せてしかるべきであろう。和本なら書名で索けるから問題は少いが洋書だとは行かない。旧分類ではBの部屋に la Collection d'auteurs célèbres と言う19世紀の「世界文学全集」が500冊程入っているがカードは無い。小泉館長時代に出た冊子体洋書目録にはリストがあり索引からも索ける。旧分類の本の古い部分は冊子体カタログが便利で筆者は古本で買蒐めて自宅に置いてある。屋根裏を探検した時、大きな状袋の中にマンドリンの楽譜を見付け驚ろいたことがあるがカードはどうなっているのだろう。文久2年の遣欧使節の版面が当時のヨーロッパの出版物から切取られ貼ってあるアルバムは確かにカードにはなっているが、カードの題名から現物を想像するのは難しかった。

最近ではヨーロッパでもプリント流行りで、ストラトキン社から Ancients monuments de la langue française と言う4巻物が出たので注文して図書館に入れて貰った。去年1月に日本学士院創立百

年祭に旧師 F. Lecoy 先生がフランスを代表して来日された。一週間の滞在で忙しい日程であったが図書館を見たいと言われるので三田にお連れして書庫を2時間近く案内した。旧書庫から開架に来られ色々見ておられるうちに「ああ、これを買ったのか、第4巻には最近新版が完結した Partenopeus de Blois が入っているし、Chate-laine de Coucy 物語も第3巻に入っていたね、Crappelet 以後、版が無いのは残念だが、と言われ愕然とした。Partenopeus の新版は筆者も個人的に持っていたが恋人の心臓を妻に食べさせる話として有名な『クーシー城主夫人物語』のクラブレの刊本はパリの古書店に探すことを依頼してあったからである。翌日しらべてこの4冊本は19世紀初頭の中世学者であり出版業者でもあったクラブレの10点計りの単行書と歴史家ペイニョ等のクラブレが出した単行本をまとめて仮題をつけて4冊本にしてプリントしたものであった。従って Ancients monuments de la langue française と言う題は既刊の書誌には見当らずこの4巻本は元来が種々の単行本の集りなので巻末の目次も最後の本の目次でしかなく、4巻本であっても十何枚かのカードをとらぬ限り中に含まれている本は検出出来ないことになる。図書整理上は厄介なりプリントであった。去年は6月に中世修辞学の大家である Paul Zumthor 氏を日本学術振興会の好意で1ヶ月日本に招びセミナーを開くことが出来たが Zumthor 氏は図書館に案内すると、先ずZの所で自著の収納状況を調べ、フロニンゲン大学教授就任講演まで架蔵されているのに喜こぼれたが書庫に入るとびっくりされ前任校の「アムステルダムに戻った気分だ。今いるモントリオール大学よりここならずと仕事が出来よう」と嘆息された。最近の私信では「文献の楽に見られるパリ」に居を定めるため定年前にモントリオール大学を辞められたと言う。他の研究者と書庫を歩くと異った眼と情報組織を持っているので大変参考になる。厨川先生、松本信広先生、森岡さん等に書庫内で行き会って色々教ったものだが書庫内で出逢



う人が少ないのは淋しい。

パリの Bibliothèque Nationale は国立中央図書館で、塾図書館と比較は出来ないが、ここを使えるようになるには半年は少くとも通う必要がある。塾の閲覧室よりずっと広い地下のカード室の中を心細い想いで彷徨ったものだが、カード室に何人も司書がいて相手をして呉れても豊富な書誌資料、カードボックスを使えるようになるのには年が要る。閲覧室周囲に二重に並んでいる叢書、辞典類は所在を示すチャートもカード索引もあるが自由に使えるようになるには場所を覚えねばならない。著作者の伝記の雑誌索引カードが地下のカード室にあることなぞ3年目位に中国学学者 Michel Cartier 氏に教わるまで知らなかった。古写本も種々のカタログがあり Omont, Delisle, を始め多くの書誌や雑誌論文に通じねばならない。架蔵資料が増えれば検索手段も種々必要になるのである。

塾の情報センターがカタログの整備に最近力を入れてるのは其の点で誠に有難い。言語文化研究所のカード等を早くユニオンに入れ、重複購入を避けて欲しいし、カードの不断のチェックも必要と思われるが、何より必要なのは人手を増やすことだろう。予算も3億円になり購書の量も増大した計りか、夢にも考えなかった古刊本、写本まで購入するようになったのは有難いが、量の増大と共に検索手段の多様化も必要となって来よう。今の人員で新図書館になるときどうなるのか、傍から見ても不安である。他方、佐藤館長の努力された欠号、端本を完本にするような作業も目立たぬが基本的なもので、司書の目の届いた細かい見直し作業、速報のような情報活動も再び必要な時期が来ているようである。

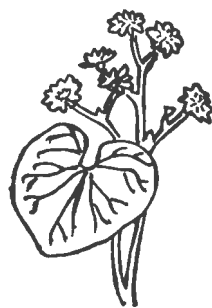
規模が大きくなれば心臓も強力にならねばならない。真の大学図書館となるには新しい強い飛躍を期待したい。

## ■オピニオン・コメント・クリティック…

### 内部からみた日吉情報センターの変遷

宮入 暁子

(日吉情報センター)



#### I はじめに

昭和48年、学園紛争のため大学卒業式中止、3月31

日に卒業発表というあわただしさをへて、学生から職員へと身分をかえた私にとって、日吉情報センターとは“図書館と研究室図書資料部門が一体化した組織”と頭の中では理解していても、イメージとしては“以前利用した赤レンガの図書館”しか浮ばなかったのは事実である。

第4校舎にあるテクニカル・サービス課に案内

され、何か見覚えのある部屋であるのに気がついた。その部屋は“1年生の時数学の講義を受けた教室だった”のである。

そこではじめて旧研究室事務室が、現在の教員閲覧室にあったことや地下書庫の存在を知り、改めて、キャンパスの両端に位置する図書館+第4校舎の事務室が、日吉情報センターであることを認識したわけであった。

日吉情報センターは、その前年の昭和47年4月に、主に学生を対象とした藤山記念日吉図書館と

教職員対象の日吉研究室図書資料部門の蔵書をひきつぎ、事務組織としての両者が一体化され発足したものである。

その目的は、増大する図書資料の収集・整理・管理を一体化することにより、全整的立場から調整を図り、より高度なサービスの効果の実施をめざすものであった。

しかし施設面では“見切り発車”の状態であったと聞く。

発足後8年たった今日、限られた予算・人員等の制約のもと日吉情報センターが、利用者たる学生・教職員に信頼されうる教育・研究活動の重要機関となるためにも、テクニカル・サービス課で洋書の収書・整理を担当してきた立場を通して、その変遷を概観してみたい。

## II 収書

利用対象のことなる“図書館”“研究室”は、サービス部門で、各々の運用を引き継いでいる。そのことは、テクニカル・サービス課において、

整理業務の一元化のもとでの、実際の作業の2本立を意味する。

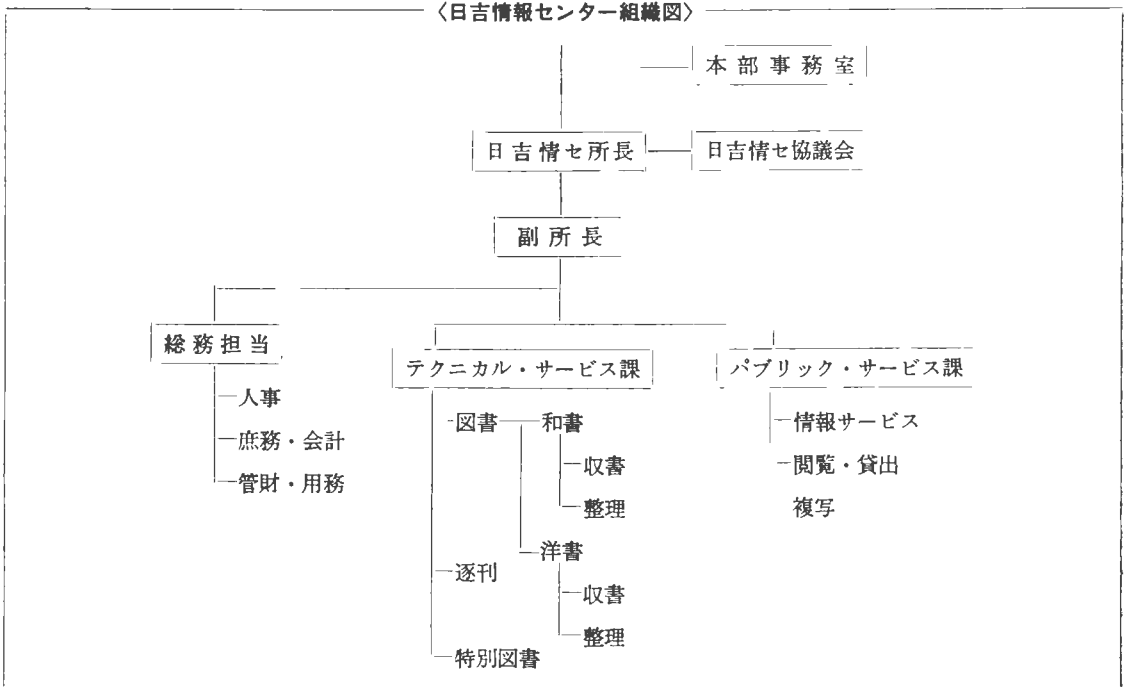
日吉キャンパスには、現在、学生11,029人が在籍し、専任教員の分野は、人文部門（美術・音楽・哲学・歴史・文学）—6.5%、社会部門（人文地理・社会学・近代思想史）—1.9%、自然科学部門（数学・物理・化学・生物・心理・地学）—28%、語学部門（英語・独語・仏語・露語・中国語）—63.6%と多分野にわたっている。

このことは、研究室図書予算の分野別の細分化の問題や蔵書構成に影響を与えている。

洋書の多くをしめる研究室用図書の場合、図書の選択権が教員側にあるので、図書委員をはじめとする教員個々の専門分野・学部・性格・モラルによって、いろいろなことが左右されるのが現状である。

収書事務の集中化は、図書館—研究室、或は研究室各部門間での購入状況の迅速な把握を可能にし、不必要な重複をさけ、必要に応じた分担所蔵を可能にし、事務レベルでの調整を容易にした。

〈日吉情報センター組織図〉



昭和49年度より、科目の多い複雑な図書予算の支出と支払事務に対処するためのシステムとしてB I C Cが稼動し、効果をあげている。

### Ⅲ 整理業務——分類・目録

発足時の昭和47年度に比べ昭和54年度は、予算面で研究室3.45倍、図書館4.6倍となり、それに伴い蔵書もふえている。

ここに、有効な文献検索手段たる分類・目録の整理業務の円滑化が問題となる。

発足以前から分類に関しては、研究室・図書館の和洋ともNDCが採用されていたため作業の標準化が推進されたことは事実であるが、研究室洋書の場合、各研究室への配架や言語別配架の問題ともからみ、土台となるべき分類体系が複雑な仕組みとなっているため、作業上において煩雑さを免れず、作業の効率上からも大きな問題が続いている。

目録に関しては、特に図書館和書における外部印刷カード使用による能率化がめざましい。昭和48年5月より、国立国会図書館印刷カードの利用を実施、昭和52年4月図書館予算に関して、センター職員よりなる図書選定委員会が発足し、「ウィークリー出版情報」（日本出版販売図書館センター刊）等を用いて選書実施、それに伴い選書と整理業務の一元化を図り、業務の省力化を進める一助として実験的に、11月より同センター作成の印刷カードを導入、昭和53年度より正式導入にふみきった。昭和54年度からは図書納品とカード到着に時期的ずれがあり、又照合に手間がかかった国立国会図書館印刷カード購入を中止した。昭和54年度図書館和書に関しては、外部カード使用は、約67.6%以上に及び効果が上っている。

洋書に関しては、昭和52年度よりアジア・ビジネス・コンサルタント(株)よりMARCカードを購入しているが、カード購入可能な図書の出版年や言語に制限があるため、まだ和書ほどの効果はあがっていない。

整理された資料は、効率よく管理されてこそ、

有効なサービスも可能と思うが、日吉の場合、広いキャンパスにサービス・ポイントが数か所に点在、蔵書として中核をなす研究室書庫と図書館が両端に位置し、テクニカル・サービス課から自動車で、図書館をはじめ各地に配付しなければならない状態は、研究室書庫と研究室そのものが全く別の建物に分離していることとあいまって、スタッフの効果的配置をさまたげ、一元的管理をむずかしくしている。

### Ⅳ 藤山記念日吉図書館での業務改革

この7年、月1・2回の割合で図書館閲覧の残務をやりながら感ずることは、利用者への積極的サービスが行なわれるようになってきたことである。受入れ冊数の増加に対応しながら、教養課程の学生中心の学習図書館として、使い易さをめざし、有効な利用を促進させようとする図書館にとって、建物構造上のハンディをふまえての打開策は、内部改装を中心とする業務の改革にあった。

このことは、KULIC11号の天野氏、KULIC10号、12号の関氏のレポートに詳しく報告されている。

### Ⅴ おわりに

今日の情報の多量化・多様化に対処するため、私たちは利用者がいかなるサービスを求めているかを的確に把握し、蔵書を生きたコレクションに形成、維持していかねばならない。

しかし情報センターは、利用者あってのものである。この働きかけが情報センターからだけでなく、利用者側からも必要である。互いの理解のもと、施設の改善をふまえ名実ともに日吉情報センターが教育・研究の重要機関となるためには、効率よいトータル・システムの確立が必要である。

## 医学情報センター最初の10年

佐藤 和 貴

(医学情報センター情サ担当係主任)



### はじめに

北里記念医学図書館という表札のとなりに医学情報センターというもう一つの表札がかかげられたのは、1971年4月のことでした。その時から10年近い歳月は、たちまちすぎ、当時は新しすぎてなじめなかった名前も、社会が変わってきたのか、このごろでは理解されやすくなってきたように思われます。この10年を医学情報センターに働く一職員の目から回顧してみたいと思います。

### 1. 10年の区切り

1971年4月に外山敏夫所長、津田良成副所長のもとで医学情報センターと名称が変わってからの、この10年をふり返ってみると、そこにはいくつかの節があることに気づきます。一つは1972年4月、次は、1974年の4月、そして、1977年10月と大きなふしが三つあるようです。

最初の1971年4月から1972年4月までは実に奇妙な期間でありました。一方で医学情報センターの発足があり、もう一方では国際医学情報センターの設立準備が行なわれている期間で、そのうえ、改称が徹底していないわけですから何が何やらわからない時期でありました。ただ組織としては一体になっておりましたので、所長以下24名の職員と百名に近い定員外職員とは今迄通りの仕事を続けておりました。

財団法人国際医学情報センターが設立されたのは1972年4月のことであります。この時から1974年の4月までが混乱期とも呼べる期間であります。同じ建物の中に二つの機関が同居し、それぞ

れの名前がごく似通った名前なので、知らない人が取り違えて混乱するのは当然といえましょう。奉仕対象が異なるという建前ながら区別はあいまいでありました。

財団法人創設とともに、医学情報センターの職員2名と定員外職員の全てが国際医学情報センターに移りました。これとともに組織構成は内部では複雑なものとなり、医学情報センターの職員のもとで国際医学情報センターの職員が仕事をする、あるいは、逆に、上司が国際医学情報センターの人であったりすることがありました。

津田副所長の更迭により、海老原正雄副所長となり、新副所長のもとで、組織の分離が進んで行くこととなりました。

1974年4月は医学情報センターにとっては画期的な時でした。前年度から準備をすすめていた複写サービスの附属事業化がスタートしたときなのです。組織の分離は資料サービスの部門では比較的速かに進んでいました。現金収入を持つ複写サービス業務が最もあとになり、ようやく分離したわけですが、この分離は医学情報センターとして独自に職員を持ち、機材を備え奉仕することが即ち利用者への良いサービスに直結するような状況があったから可能であったわけです。

このときから、国際医学情報センターとは全く別に医学情報センターの活動がはじまることとなりました。しかし、全てが一度にうまくいくわけではなく、1977年9月までは、数メートルと離れない距離に隣合って複写サービス受付カウンターが2ヶ所あり、利用者により、あっち、こっち、と受けをわけていたわけです。

このように区分されても、製薬企業の販売促進員らが医学情報センターの中を往き来するありさまは残念ながら少しも改善されませんでした。そこで、医学情報センターは国際医学情報センターとの契約の更改を機にカウンター部分の明け渡しを迫りました。結局、1977年10月からは、国際医学情報センターは地階部分100坪で営業をすることになり、医学情報センターは総務部門を除き1階で仕事をするようになりました。

1977年10月からの医学情報センターの活動には混乱と混迷を抜けて自らのペースをとり戻した感があります。

## 2. ヒトの10年

医学情報センターの発足当時、所長は衛生学の外山教授の兼任でありました。外山先生は、北里記念医学図書館の館長から継続して所長になられたわけです。次いで解剖学の嶋井和夫教授が所長になられました。しかし、医学部長に就任されたために数ヶ月でお辞めになりました。

図書館長あるいは所長は基礎系の先生が勤められるように思われておりましたが、嶋井先生の後任には精神神経学の保崎秀夫教授をお迎えいたしました。1975年に就任されてから現在迄ずっと所長職を勤められています。

津田副所長は医学情報センター発足と同時に、文学部教授（図書館・情報学）となられ、多忙を極めておられました。そのうえ、国際医学情報センターの設立に力を注がれ、設立後は業務担当理事として活躍されるという激務をこなしておられました。そこで、医学情報センター副所長職には、日吉の藤山図書館から海老原正雄氏を迎えました。海老原さんは1969年4月に四谷から日吉に移られた方でありましたから、約3年ぶりです。四谷に戻られたわけです。

海老原さんは1977年5月、停年までに1年を履して勇退されました。海老原さんのあとの副所長には、四谷から1968年に工学部図書館へ転出された大沢充氏が矢上の理工学情報センターから迎え

られ着任、現在に至っております。

職員の交代を逐一報告するわけにはいきません。1971年当時の在職者で現在も残って働いている職員はわずかに6名を数えるのみです。とくに1976年から1977年にかけては係主任級の交代、削減があり、業務遂行上困難なことが多かったように記憶しています。

## 3. モノの10年

モノ即ち本や雑誌として考えてみると、いささか複雑な思いになります。この10年は決して平坦な道ではなかったからです。1971年度の増加冊数（図書）を100とすると、1972年度は約22.1、1974年度は34.4しか増加しませんでした。1975年度以降は順調に増加しはじめ、1977年度になって1971年度の増加冊数を上廻り129となりました。1979年度は図書増加冊数がかなりの数になる見込みです。先生方から新しい本がふえたことを喜ぶ声が聞かれるのは、きびしい年月を経てきただけに、心からうれしいことです。

継続してとっている雑誌についても同じようなことが言えます。1971年度には和雑誌907、洋雑誌1,455の計2,362誌を受入れていましたが、1972年度には1,961誌、1973年度には1,923誌、1974年度1,924誌、1975年度1,867誌、そして1976年度には1,846誌と減少を続けました。1977年度からは増加に転じましたが、1978年度は和雑誌1,014誌、洋雑誌1,105誌であり、1971年度の数字をまだ回復できていません。しかし、数年前には各教室の意向を伺って雑誌の新規発注をしたこともありますし、かつて、止むなく中止した雑誌を再び購読するように手配したのもかなりの点数があります。購入希望雑誌を寄せられる先生も見受けられることから、評価されていることと信じています。

モノをイレモノ、建物として考えてみましょう。1974年度の統計に面白い数字が出ています。蔵書統計のうちの収蔵可能数、現所蔵数、スペース余裕年数の部分のことです。余裕年数とは、スペース冊数を年間増加冊数で除した数値と注がつ

いています。そこに、医学情報センターの余裕年数は0.53と記されています。つまり、約半年で収蔵可能数を上廻ってしまうことになっています。

小金井工学部跡地への運搬や密集書庫の設置などの手段を講じることにより、実際にはこのようなことにはならなかったわけです。しかし、もう限界に近いようです。

近年、図書の受入冊数が増加していることは既に述べました。雑誌はサイズが大型化する傾向、一号の厚みが増す傾向、そして年に複数巻出版される傾向がみられます。これらはすべて量の増加にあらわれてきます。どのような計算をすれば良いのかはわかりませんが、数年を経ずして書架という書架、書庫という書庫は本でいっぱいになってしまうことでしょう。

最後に、無形のモノとしてサービスを考えてみましょう。医学情報センター発足当時は実に多種多様なサービスを提供していました。そのことを知っていますし、たずさわってもいただけない、その後のサービスの縮小、低下を書くことにはちゅうちょしてしまいます。というのは、国際医学情報センターの営業開始とともにサービス、特に情報提供サービスは殆んどすべてそちらに移ってしまったからです。

医学情報センターでは図書館本来の——と言えば体裁は良いのですが——資料提供サービスが主体となりました。そこで主たるべき資料がどのようなありさまであったかは前に述べました。図書や雑誌の貸出冊数は毎年度下降を続けました。1976年度で低落傾向にも歯止めがかかり、以後は徐々に前年度を上廻るように貸出冊数が伸び続けています。

1974年度以来、複写サービスはカウンターでの受付、相互貸借による申込みを含めて年間60万枚のコピー、5千コマのスライド作成などを学内を中心とした利用者、学外の研究者に提供しています。1976年1月からは、新着雑誌の目次を複写して利用者の手許に届けるという目次コピーサービスを開始し、単に複写して提供するだけのコピ

ーサービスとは少し趣のちがう仕事にとりくんでいます。

1979年4月にはコンピュータの端末器を導入しました。これにより、特殊法人日本科学技術情報センターのコンピュータと接続して文献検索ができるようになりました。文献検索サービスを再開することは医学情報センターの悲願でもあったわけですから、とても喜ばしいことでした。約1年のあいだに200件以上の依頼を処理し、予想以上の成果をあげています。

#### 4. カネの10年

図書購入費の推移を統計上でみると、1971年度は前年度比0.6%増でしたが、以後は順調に増加し、1974年度から1977年度までは対前年度比21～29%という高率の伸びを示しています。この結果、1971年度の図書資料費実績を100とすると、1978年度は365.4と実に3.6倍にも増加しています。この間には、オイル・ショックなどによる経済変動や、ドル安円高に代表される外貨事情の変化など、いろいろな外的条件にさらされました。消費者物価指数などとの比較により実質的な図書購入費の増加を調べる必要がありますが、ずい分増えたものだと改めて感心しています。

#### おわりに

筆のすすむままに書き連ねてきた医学情報センターの10年のことではありますが、書き落したことがらがあれこれと思ひ浮かんできます。去っていった人々の顔も次々と浮かんできます。医学情報センターとなる前に、あまりに大きな歴史を持つ北里記念医学図書館ではありました。医学情報センターに変わっただけならともかく、国際医学情報センターを独立させて小さな世帯になってしまった医学情報センターにそれまでと同じ大きな歩み続けることは困難でした。そこに、一つの落ちこみがあったことは当然のことでしょう。しかし、今はたち直り、着実に歩を進めています。若い職員たちの力を信じて、筆をおきます。

## ■オピニオン・コメント・クリティック…

## 理工学情報センター寸感



いまから30年ほど昔の冬休のことですが、私は目黒の藤山工業図

書館に毎日通って一冊の材料力学の本を読みあげた思い出があります。当時は本屋さんでほしい本が中々見つからなかった時代で、図書館というものは大変ありがたいところだと思ったものです。

20年ほど前の小金井時代には、図書室（まだ工学図書館とはいっていませんでした）の窓際の机に向かって毎日洋雑誌に読みふけた思い出があります。私はこのことによって、いまも続けている振動学の分野に興味をもちはじめたわけで、やはり図書館というものはありがたいところだと思いました。

10年ほど前の矢上時代開幕の当時は、ある連載記事を書くために、当時の大沢さん、中島さんらに大いに助けられた思い出があります。このときもやはり図書館（理工学情報センターという冗長な名に変わっていましたが）はありがたいところだと思いました。

この稿は10年ほど前のことから書けというお話をいただいています、その後の図書館の利用形態はずい分変わったものです。10年前に書かれた図書館の未来像を読みかえしてみると、文献情報、技術情報、閲覧、複写、印書、翻訳、資料処理などのサービスが理想的な姿で提供されることになっています。その一部は確かに実現されていて、特に日本科学技術情報センターの資料がオンラインで提供されるようになったのは一つの進歩です。慶應義塾における図書館の集中管理体制や図書館の公共性を重視した開放的な運営方式はこ

下郷 太郎

(工学部教授/機械工学)

れからの発展にも大きく寄与することでしょう。

しかし、10年以上の昔に感じた素朴なありがたさを、私はいまでも図書館の理想像として考えています。それは図書館で働く人たちのサービス精神に支えられてきたものかもしれません。このサービス精神はそこに働く人々の深い教養に根差すもので、実際、工学部の図書館には、昔から知的魅力を感じさせる個性豊かな人々が働いていました。図書館学科出身の専門家によって、そのサービスにはさらに磨きがかけてきました。いまこの稿を書くうちにも色々な人物群像が次々と想い出されます。

工学部の図書館の歴史は、悪戦苦闘の連続というひと言で表現されそうです。人は足りない、場所がない、等々。私は一利用者として、それでも有難味を感じていましたので、昭和47年頃から私の研究室の学生諸君に、図書館の臨時職員としてお手助いをしてもらうことにしたのです。これは図書館のサービス業務に何んらかの貢献ができるばかりでなく、学生諸君が図書館を内側から見ることによって、一つの貴重な経験をもつことになるだろうと考えたからです。いまではこれが私の研究室の恒例業務の一つとなって、学生の自主管理にまかされています。

最近の私は、学術誌のコンテンツ・サービスをうけているだけで文献情報公害に悩まされている状態ですが、もっと積極的な利用者から見ると、図書館に対する要望はまだまだあるようです。私の研究室の吉田和夫君の話を総合すると、まず図書館ニュース速報なるものを出してはどうかということです。私はかつて中央試験所や計算センタ

一の運営をまかされたことがあります。いずれもサービス業務を目的とする機関で、常にサービス内容に関する具体的なニュースを利用者に流すことを怠っていませんでした。KULICのような機関誌も必要かもしれませんが、もっと実務的な速報が利用者にとっては重要なわけです。情報センター自身の情報が足りないようでは困ります。

たとえば、すでに実行されているものもあるようですが、雑誌名が変わったとか、どの巻号が欠番になったとか、いつから製本に出すとか、新着の雑誌にこんながあるとか等々を、ビラにして配布するよりも案内板の形で図書館の入口に張り出してはどうでしょう。文献情報サービスをうけるための手続きや経費、閲覧や複写の方法や規則などは、図書館をよく利用する人には常識となっ

ていますし、はじめての人は教職員に配布されている工学部ハンドブックを見ればよいわけですが、図書館の利用方法について意外に知られていない面があるのに驚くことがあります。

図書館から利用者への情報伝達ばかりでなく、利用者から図書館への提案もあるはずですが、これについては協議会が機能する必要があります。ところが比較的良好に図書館を利用する若い世代の人々から見ると、この協議会がうまく機能しているとはいえないようです。協議会の委員自身がまず図書館の利用者の声を直接よく聞く必要があります。中々これも大変な仕事には違いありませんが。

最後に、現在の情報センターの職員の方々の日常のご健闘に敬意と感謝の意を表する次第であります。

#### 〈昭和54年度の年次報告から〉

##### ◇三田情報センター

昭和54年度に購入したコレクション、古書のうち、主なものは次の通りである。

- ① English Dramas of 17th and 18th Centuries
- ② ドイツ社会政策コレクション
- ③ ソ連・東欧研究コレクション
- ④ 米国商業経営史及び多国籍企業史コレクション
- ⑤ Karl Banse Collection
- ⑥ アメリカ政治史コレクション
- ⑦ Caxton, Chronicles of England
- ⑧ フランス及びヨーロッパ文献古書シリーズ
- ⑨ グーテンベルク42行聖書(リプリント)
- ⑩ 三人法師、熊野の本地、玉藻の草紙、他

##### ◇日吉情報センター

広範な主題や複合的な主題をもつ図書、あるいは研究活動に基本的に必要な書誌など、従来予算上の制約から日吉研究室で購入できなかったものを日吉情報センターとして購入しうる道

を開いた。その第一号として16~18世紀のドイツのパンフレット集成(マイクロフィッシュ版)「Gustav Freytag's Sammlung der 6265 Pamphleten aus der 16, 17, und früher 18 Jahrhundert」を購入した。

##### ◇医学情報センター

54年度は雑誌資料を200タイトル拡充し、単行書を3,216冊(これは過去5年間の平均の2,3倍にあたる)収集した。医学書の整備は急ピッチで進みつつある。

##### ◇理工学情報センター

- ① 昭和45年以来、継続して寄贈されてきた日本科学技術情報センター資料は54年度分約7,000冊の受領をもってその受け入れ計画を終了した。この10年間に受領した資料の総数は約6万冊となり、理工学情報センター資料の約半数を占めている。
- ② 化学分野の二大叢書の一つである Gmelin's Handbuch は、これを2年間に分割して購入することになり、今年度はその約半数142冊を入手した。



## NLS磁気テープについて

佐野陽子

## —研究とデータ—

自然科学はもちろん社会科学でも、研究とは推理小説を解くようなもので、自分の仮説が証明されたときの喜びは格別である。その仮説が、練りに練ったもので、なおかつ通説に反するものであるほど、その喜びは大きい。ところでその仮説の証明であるが、私たちは実験や調査などから必要なデータを利用する。社会科学はこれまで、実験ができないことになっていたが、合衆国では資力と人力と時間を投入して、人々の経済行動実験を行うに至っている。それはさておき、経済学の分野で圧倒的に私たちが使うデータは、既存の統計資料である。大量の調査結果を幾重にも階級分けした平均値を用いる。ところが、このようなクロス集計はもともと特定の研究のためのものでないから、私たちは常に、靴の裏から足をかくような焦躁感を感じている。仮説を白か黒か決めかねて、灰色で満足せねばならないことが多い。

はっきり言えば、世帯や企業の個々の情報を知りたいのだが、通常の統計調査は個体がどれか分らぬように集計してしまっている。自分たちの手で調査をすればよいのだが、多数を相手とするとき、コストは莫大なものとなる。

ところで合衆国では、このような調査を研究機関が行って、個別情報のデータをテープにして研究者がそれを購入できるようになっている。企業の有価証券報告書などはすでにそのような形になっているが、世帯のマイクロ・データが利用できるようになったのは、1960年代後半からだろう。

## —NLSの出現—

The National Longitudinal Survey (全国個人追跡調査)は、このようなマイクロ・データの中でも卓越したものである。それは個人を毎年あるいは隔年、追跡して面接調査などをするもので、すでに

1966年から9回調査が行われていて、さらに今後も追加されて行く。内容は、労働市場経験と人的資本と社会経済学的条件の各変数である。例えば、現在や過去の就業経歴であるとか、教育・訓練・健康・家族の状態であるとか、職務満足・就業態度・退職の見通しであるとか、およそ70項目についての回答が網羅されている。

1時点の調査としても価値があるのに、10年以上にわたる蓄積があるのだから、その利用価値は測り知れない。調査対象は4つのグループに分れており、(1) Men 45—59歳 (5518コーホート)、(2) Boys 14—24歳 (5713)、(3) Women 30—44歳 (5393)、(4) Girls 14—24歳 (5533)となっている。

## —NLSを利用した諸研究—

NLSのハンドブックや、逐年刊行されるニューズレターに、既発表の論文や進行中の研究が紹介されている。これを見るまでもなく、近年続々と発表される若手研究者の学術論文を見ると、このNLSがいかに活用されているかが分る。これらの研究は労働市場関係が主であり、教育投資、労働移動、二重労働市場、差別、健康投資、職務満足、組合運動、結婚市場、最低賃金制、労働供給など、実に多岐にわたっている。これらの中で、最近特に目立つのは移動関係である。10年を越える追跡が可能になって、職務や職場の移動歴をつぶさに知ることができるからだろう。

## —NLSの評価—

マイクロ・データ、とりわけこのNLSが、労働市場研究やマンパワ管理研究の発展にいかにか寄与したかは、発表論文の量と質をもってすれば容易に知ることができる。さらに、労働に関係する社会学や心理学の分野でも利用されつつある。調査項目が伝統的な人口学的変数や経済学的変数にとどまらず、意識や態度のような社会心理学的変数をも包含しているゆえ、社会科学の中の学際的な interdisciplinary 協同作業を進める一助にもなるだろう。願わくば、日本でもこのような調査データを作りたいものである。

商学部教授(労働経済学)



## レファレンス 500日

市古 健次

レファレンスの仕事に就いて、はや1年半が過ぎようとしている。この仕事をやると聞いて、最初はかなり戸惑った。というのは、私は政治学、特に中国近代史のみぞ知る人であるからだ。そんな人があらゆる分野の質問に対応できるかという心配が脳裏にはびこってしまった。しかし、こうした心配も、東田情報サービス担当課長をはじめ、周りの人々の協力で、次第に取り除かれていった。

ところで、「レファレンス・サービス」という、図書館員にとっては何の変哲もない言葉も、意外に知られていないようである。オフクロは勿論、友達も知らない。ゼミの学生を対象にアンケートを行ったところ、「知っている」と答えた学生は、僅か30パーセントに過ぎなかった。

言葉の問題は扱措、昭和54年度の参考業務統計に依れば、いわゆる“reference question”の件数は、11,000件にもおよび、ちょうど三田の学生が1年に1回質問した数に相当する。質問の種類は、ある本の所在のみを尋ねる単純な質問から、専門的な調査を要する質問におよび、質問者も、学生、教員、職員、外部と様々。こうした質問者に対する応待は、カウンターにおける口頭で、あるいは、電話、手紙といった方法で行っている。このように、レファレンス・サービスに寄せられる質問の性格、利用者、手段は種々雑多なのである。

では、利用者が、どのような質問をして来るのか、その実例を挙げてみよう。最近『近代中国関係目録』という本が出版された。ある学生は、この参考図書が読みたかったのであるが、探せず、尋ねて来たのである。その時の質問は、「近代中国関係の本で、今年（1980年）の2月か、3月に出たもので、大変高価で、2～3万円する本はどこにありますか。」というものであった。学生の説明は正確ではないにしろ、すべて当たっている。実際この本は、

1980年2月に出版され、23,000円であった。このように学生からの質問は、その殆んどが、片手落ちとも言えるものなのである。そして、この場合のように、自分がたまたま知っている本であれば、曖昧な質問でも、推測も可能なのだが、全く知らない本であれば、手に負えない場合もあるのである。

また、次のような質問もかなり多い。それは「フランス革命に関する本、論文を探して欲しい」といった、あまりに広範なものである。一般的に、人文・社会科学分野を扱っている文献目録は、その数が多く、カード目録から1つの文献目録にあたってみるという常套手段で片づくものはないのである。

そして、自然科学分野における検索のように、比較的一定した方法というものはないために、殊更、厄

介でもある。その上、外国語の問題がある。この場合でも、どうしても仏語で書かれた文献目録を利用しなくてはならないだろう。現在、三田で行われている授業は、少なくとも、英、独、仏、西、露、中と6か国語にもおよび、この6か国語のマスターは、レファレンス・ライブラリアンの必須の要件であると感じられる。こうした、人文・社会科学分野の文献目録の複雑性と、外国語の壁は、一見単純そうな質問をも、決してその限りでなくしている。

このように、レファレンスで多くの質問に直面すると、自分に課せられた仕事の重さを感じざるを得ない。そして図書館利用のオリエンテーションの企画、サイン・システムの研究、さらには、経・商・法・文分野を「広く深く」知ること、ゼミ対象の文献目録の作成も必要であると思われる。更に、外国語をも習得しなければならない。

したがって、私が、「利用者と図書館」を結ぶ、一流のライブラリアンになるためには、以上のことを行いながら、自己鍛練を繰り返していかなければならない。これが私の、「レファレンス500日」の実感である。

（三田情報センター情報サービス担当）



経営管理研究科の図書館が完成してからちょうど1年がたとうとしている。この図書館の延べ面積は200坪であり、そのうち1/4が地下にあるという変則的設計になっている。現在の図書規模は単行書が約12,500冊、逐次刊行物が約370タイトルであり、2人の司書の方々が、若干のアルバイトの方々の助けをかりて、これらの図書を整理しているのが現状である。

この経営管理研究科図書館の特徴は、この図書館が経営管理研究科の学生・教員を対象としており、その図書がビジネス関係にほぼ限定されていることである。このような専門化は、少ないスペース・図書予算・司書人員という制約条件のもとで、経営管理研究科の授業内容に合致した図書館の機能を高めようとしたことの必然的結果であったともいえる。そして、このような専門化志向の状況において、学生・教員等の利用者にとっての有効性を高めるために、図書館側としても若干の努力を払っている。第1に、「ビジネス・スクール」としての性格上、どうしても最新の資料が重視されており、雑誌を初めとした定期刊行物の充実が重点がおかれている。有料購入による資料のほかにも、民間企業の刊行物の整備も重視されている。第2に、定期刊行物を規則的に確実に受入れることが重要である。このため、国内・国外を問わず、出来るだけ出版社から直接購入をする方針をとっている。これは、以前、大手書店に依存していたために、雑誌受入れが大混乱となったことの改善策としてとられているものである。第3に、これら定期刊行物を中心とした所有図書の利用効率を高めるために、企業カードを作成している。これは経営管理研究科の授業がケース討議を中心に

行なわれていることから、学生からのニーズも高く、企業研究に大いに役立っている。第4に、図書分類をビジネスの進展に対応出来るようにしておくことが便利である。ところが、経営管理研究科の授業内容との関連でみると、日本における分類は時代遅れであった。このため、アメリカにおける図書館利用の経験をたよりに、LC分類を採用することにした。最近では、外国図書にもLC分類が表示されているケースが増えてきているが、必ずしも適切とは言えない分類もみられる。したがって、この図書館では、日本の図書も含めて、司書の方々の判断によって見直しを行なっている。このような分類検討作業は司書の方々のビジネスに対する理解を高め、サービスの質を高めることになっているものと期待している。

ところで、経営管理研究科図書館の今後10年程度の授業はどうであろうか。現在の状況から判断すると、図書予算と人員について多くを望めそうもないし、スペースも限定されている。したがって、今後とも、「量」の改善とともに、「利用効率」を重視する方針をとらざるを得ない。第1に、「量」の問題では、産業統計を中心とした資料を充実するとともに、定期刊行物をさらに増加させたいと思っている。教員のなかにはビジネス以外の図書も充実すべきであるという意見がみられるが、これは他情報センター利用によって補ってもらわざるを得ないと思っている。第2に、「利用効率」については、産業カードの作成に着手するとともに、若干の資料・新聞のインデックスについてのコンピューターによる検索も可能にしたいものと思っている。特に、産業カードは授業との関係から、利用者のニーズは一層高まっており、早急に担当図書館員の問題を解決したいものと思っている。第3に、現在整備中の企業資料（有価証券報告書、社史、Annual Report等）を統合し、それによって1階に「企業資料ルーム」を出るだけ早い時期に実現させたいものと思っている。

最後に、学部・会社時代を含めて、図書館を煙草をすいながら談話したり、居眠りする場所と思っている多くの学生達に対して、この図書館の利用作法を理解してもらうとともに、魅力的な情報収集の場としての効用を今後とも一層高めてゆきたいものと考えているところである。

（経営管理研究科助教授 鈴木貞彦）



# 目 録 の 将 来

渋 川 雅 俊

(三田情報センター整理課長)



## ◇図書館の成長の問題

図書館は成長する。何故成長するか、理由ははっきりしている。蔵書が増加するからである。しかし、成長とは、蔵書の数量的膨張だけではなく、コンテンポラリーな学問の進展を質的に反映している。したがって、図書館の成長は、研究・教育資源としての蔵書が内容的にも豊富になってきていることも意味している。

蔵書の質的拡大は、それを促した学術研究情報要求が精密化したことと相関関係にある。今日の学術研究や高等教育では、内容的にも形態的にも多様な資料を必要としている。利用の面ではそれらの資料は多様な様態で活用されるようになってきている。

図書館は、集められた資料を、いかなる場合でも、またいかなる要求に対しても、適宜利用できるように、系統的に組織し、整然と保管しておくことを目標としているわけだが、同時に、図書館の成長に応ずる体制を発展させて行くダイナミックな運営が大切である。大量の図書資料が蓄積されると書庫が一杯になる。やがてその拡張が必要になるが、それに伴って内部の諸装置や人的資源の拡充も計られなければ、図書館の成長につれて発生する様々な問題を解決することはできない。新図書館の建設は、まさに、三田における図書館の成長から生れた諸問題を解決する方策であると理解されなければならない。

つい先頃まで塾生、教職員、そして少なからぬ数の塾員の関心は、新図書館が三田のどの辺りに建てられるか、また、どんな建物になるのかと言

うことに集まっていた。今年のはじめに、第二校舎が取り払われ、そこに高い塀で囲まれたスポットができた。建設工事が眼前で行われている今、最大の関心は、図書館の中の様子がどうなるかに向けられている。

今度の図書館建設は1912年(明治45年)以来のことである。これまで幾度かあった書庫の増改築と違って、それは三田情報センターにおけるサービスとその運営の一大変換の契機となる筈である。慶應義塾の図書館運営については、丁度10年前に、図書館と研究室(図書館部門)の統合を基盤とした研究・教育情報センター計画が実施されて一つの転換があった。三田においては、今度の図書館建設をもってこの計画の一応の完了とみることが出来る。しかし、それは同時に新たな変換への第一歩となることに違いはない。

新しい図書館の内部の様子がどうなるかについて、今度の計画には、新しい施設はもとより、現図書館施設も利用して三田情報センターを運営する、と言う前提がある。また、現在センターが使用している三田研究室施設は、研究室施設の拡充に使用されることになっている。したがって、その様変りは大きく、広範にわたることになる。

たとえば、図書の配置、雑誌を中心とした資料の編成と配置、図書館の開館時間や貸出にかかわる利用規程、カード目録の配置など現在のものと同じになるところは、一つもない筈である。利用者には直接関連のないところでの変化も少くない筈である。図書資料の収集手続やセンターを運営する管理組織なども変らざるを得ない。しかし、どう変換するにしても、情報センターの基本方針

は、これまでもそうであったように、長期的な展望の下で図書館サービスの目標を立て、それを踏えて、常に現状より少しでも良いものを作りだす、そして、一つの変換や改善が次の発展への基盤となるように努力することで一貫している。

新図書館は1982年4月に開館の予定である。その時点で多くのことが様変わりする。しかし、装いも新たに、整然と利用者に提供できることがある反面、新しい条件の下で新しい方式を導入することができても、その効果が直ちに表面に現われないものもある。その中で最も重要なものが目録であろう。目録は、今では100万冊を越えたセンターの蔵書の中から、利用者が必要とする図書資料の所蔵を確め、そしてそれを入手する手掛となるものである。それがこれまで以上に整備されなければ重大な問題である。

新図書館の開館と同時にカード目録は新しい施設の一階目録ホールに移設される。また、著者名(合同)目録がもう一セット(冊子体)新たに作製され、研究室(あるいは研究室に最も近い場所)に置かれる予定である。このように目録も表面的には若干様変わりする。しかし、その中味は、他のことと違って眼に見えては変らない。

何故そうなのだろうか。現在の三田情報センターの目録は、慶應義塾図書館の目録と三田研究室の目録を土台にして発展したものである。図書館の目録は凡そ70年前に始めて作られた。当時の蔵書数は5万冊余であった。目録法は、当時の最も標準的な方法に基づいて設定されていた。その方法は5万冊余の蔵書を整理するのに十分であった。研究室の目録も1950年代に図書館の目録法に準じて作られ始めた。研究室の蔵書も最初は小さいものであった。

図書館で始めて目録が作られてから凡そ50年後、1960年代の前半になると、三田の蔵書は約50万冊になった。5万冊蔵書のときのやり方で図書を整理するのが困難になった。つまり、そのやり方では図書整理の実効性を上げることができなくなってきたのである。そこで1962年に、当時の最も標準的な目録技法を採用した。しかし、その時、その新しいやり方の適用を受けたのは、その

年以降に受け入れられた図書に限られた。既存の50万冊について整理のやり直しをしたくとも、そのための労力やそれに要する経費を考えると、できなかったからである。整理法のはじめての切換えはいろいろな問題を持たらすことが予想され、いろいろと検討がなされた。最も重要な問題は、古いやり方で作った目録と新しいやり方で作られる目録をどう関連させるかであった。両方を切離すのも一つの方策であったが、それでは利用上大変不便であると判断した。そこで、新しい目録カードを古いカード目録にファイルすることとした。著者名目録と書名目録はそれが可能であったが、分類目録の場合には、分類法のシステムが違ったので、一本化することができなかった。

図書館が目録法と分類法を切換えた後でも、研究室では、図書館の旧来の目録法に依っており、また、分類法は、学部ごとの独自分類で図書を整理していた。当時はそれで十分であったからである。1970年、図書館と研究室図書部門は、機能的統合を目的に合併し、三田情報センターが発足することになった。その時までには図書館では図書整理技術の改善に努めていたが、センター発足以降は、図書館が受入れる図書も研究室図書も同一の目録法により、統一の事務手続に従って整理されることになった。

三田情報センターの目録は、このように、何回かの技法上の変更や技術改良が加えられでき上がったものであるが、それにもかかわらず、眼に見えた変化は現われなかった。それは、一つには、技法上の変換を計ったときも、過去に整理したものを含めて整理することをせずに、新しいものだけを新しい技法で整理し、古いものとの融合を計ることだけが作業の目標となってしまったからである。既存の目録と新規の技法による目録の調整はうまく行った。しかし、図書館の成長、とくに蔵書の内容が豊富になるにつれて、また、利用の動向が変化するにつれて生ずる多様な要求を受けとめ得る目録を準備することはできなかった。

三田情報センターは、昨年、新図書館開館準備に必要となる図書資料配置に関する基本方針を各学部に提案した。提案の内容は次のようなもので

あるが、これは、昨年11月から今年3月にかけて、三田情報センター協議会特別委員会で十分に検討され、5月7日に、同協議会で了承された。

新図書館開館後は、学部・図書館の別にかかわらず、すべての図書資料は、その利用効率を高めるために、同一主題の図書資料群、または、特定研究の図書資料群を総合的に組織し直すことを目標とする。そのために三田情報センターは、コレクションの再編成に必要な事務遂行上の条件、とりわけ、人的条件の確保に努力し、さらに、資料検索方式の一層の整備拡充を計る。図書資料の具体的な配置については、以上の方針を基にして、三田情報センターが各学部と協議して決定する。なお、雑誌資料は、図書館雑誌コレクション、文学部、経・商資料室、法学資料室コレクションを新図書館3・4階に配置する。

この案の検討の過程で、図書資料の配置と密接な関係にある目録の問題についても検討された。本稿は、そこで検討された目録整備・拡充計画のあらましを、改めて三田情報センター利用者にお伝えし、目録の将来についての三田情報センターの考え方をご理解願う目的で書かれたものである。その目的だけであれば、第三項目、「目録の問題点と今後の課題」、第四項、「目録の将来」について一読いただければ結構であるが、問題のあり方や将来のあり方は、目録を作る意義や目録を作る技法の原理の理解がなければ、本当の意味で理解していただけないと思う。多少技術的な点に立ち入ることになるが、第二項、「資料組織とは何か」第三項、「資料組織の技法」にも目を通していただければ幸いである。

#### ◇資料組織とは何か

目録を作ることを、普通は、図書整理と呼んでいる。しかし、ここでは、そのはたらきから考えて、「図書整理」とは言わずに、「資料組織」とすることにしたい。

資料組織は、図書館の全体的なはたらきを構成している四つの重要な機能の中の一つである。そ

の四つとは、図書資料を集める、まとめる、しまう、提供することである。資料組織の機能は、この中で二番目のまとめるはたらきをする。

資料組織の仕事は、一般には、蔵書の中から特定の図書や雑誌を検索するときに使う目録を作ることと考えられている。もう少しこまかいところまで言えば、目録のカードを作り、それを著者名や書名の順に並べカード目録を編成することと思われる。確かにこれは、資料組織の重要な仕事ではあるが、目録を作る、とくに著者名や書名目録を作るだけでは、まとめるはたらきは果せない。図書資料をまとめるためにはもう一つ大事な仕事がある。それが分類である。図書の分類は、まず図書を書架上のどこに並べるかを定めるためにする。また、利用者が特定の主題の本を書架上の配列から探すだけでなく、別の方法、つまり、著者名から本を探すときに著者名カード目録を使うが、それと同じように、カード目録から本を探せるようにするためにも行われる。

目録と分類、何故これらの二通りのやり方で図書資料をまとめようとするか。理由は二つある。一つは集まってくる本の量である。もう一つは本の特殊性とでも言おうか、ある程度の量の本のかたまりの中から一冊の本を探す場合に一通りのまとめ方では探せないからである。

本は、それを読みたい、また読まなければならないから買われる。読んでしまって不要になり、紙屑としてチリ紙交換に出せれば簡単である。しかし、そうできないのが普通である。捨てることがないから溜る。溜まればきちんと整理しておかなければならなくなる。見た目もあるだろうが、本当は、あとで読むことが必要になるからである。整理整頓しておけば、必要なときに必要な本をすぐに探し出せる。資料組織の意味はここにあるわけである。

個人の蔵書であれば、そのまとめ方は；本そのものを書架にどう並べるかによって整理されるのが普通である。その場合、使い勝手の良さを考えて整理する方法はいろいろ考えられる。いずれの方法でも、本を探す目的を果すために、それ程困難はない。

確かに個人文庫の場合であっても、1,000冊とか、2,000冊とかになると100%自分の使い易いように蔵書をまとめることがむずかしくなる。それは、個人が集めた本でも、そのすべての内容を隅隅まで把握して、それを自分の使い勝手、つまり、自分の学問や研究の体系にぴったりと合わせることができないからである。研究の体系についても、それがいつも固定しているわけではないからでもある。それでもたった一人のものであれば、おおよそのところがまとまっていれば、それでなんとかその蔵書を身近な情報源として役立たせることができる。どうしようもなくなれば、また最初からまとめ直すことができる。

しかし、初めから図書資料を蓄え、それらを多くの人たちに活用してもらって、その人たちの仕事に役立たせようと言う意図で設置されている図書館では本をまとめることは、それ程簡単なことではない。図書資料は個人の蔵書と比べ極めて数量的に多いからであり、また、多数の異った目的をもった人たちがそれを使うからである。こうした条件の下で図書館では、それなりの工夫をして図書資料をまとめる。この工夫が、いわゆる「専門的」(この言葉はしばしば「七面倒臭い」と言う意味で使われることがある)な技法である。この技法の最も根本的な目的は、図書資料の外味をまとめること、その内味をまとめることである。外味とは、物理的な存在としての図書資料のことであり、内味とは、その外味が運載している情報のことである。

ライブラリアンは、それこそ大昔から、集まってくる図書資料の外味と内味をどうまとめるかを工夫してきた。その結果として今われわれがもっている資料組織法が成立したわけである。

#### ◇資料組織の技法

何十万、何百万冊の図書資料をきちんとしまうために、図書資料をまとめる技法が必要となる。それと同時に、もっと大切なことであるが、図書資料を提供するためにもまとめる技法が必要となる。資料組織法は、図書資料をしまう<sup>1</sup>と探す<sup>2</sup>、両方のための技法である。われわれは、幾つかの技

法を組合せて使って、資料組織の目的を果す。

資料組織の第一の技法は、図書資料の外味をまとめるために展開される。それらを書庫のどこに配置するか、また書架上どう並べるかを定めるためにである。われわれは、それらを分類法によって、論理的に実行する。「論理的」と言ってもそれ程むずかしいことではない。たとえば、同じような形態の資料があれば、それらを類別してまとめる。つまり、マイクロ・フィルムであればマイクロ・フィルムだけでまとめることである。また、同じテーマの本が何冊かあれば、これらを書架上一緒に並べておくようにする。たとえば、犯罪心理学、犯罪社会学、具体的な犯罪現象の記述、そして、犯罪に関する統計などの本が何冊かあれば、それらを犯罪に関する本のかたまり、あるいは犯罪学の本としてまとめて書架上に並べる。さらに、死刑とか財産刑とかについての本があれば、犯罪学の本のかたまりの隣りに並べる。つまり、分類法は、同一または類似の主題や形態の図書資料を集めると言うことと、そうしてできた幾つかの図書資料のかたまりの間にある関連性に分かり易い序列を付けて書架上の位置を決めるための技法である。

技法の原理はむずかしいものではないが、その「論理的に」と言うことを何を基準として決めるかにむずかしさがある。個人文庫の場合は、一人の個人の頭の中にある図書分類の体系に従ってやれば、書架上、本の配列の論理性は保たれるかもしれない。しかし図書館の場合にはどうすればよいだろうか。なかなかむずかしい問題である。ここに、多くの人たちがある程度納得できる図書分類の体系が必要になってくる。これが図書分類表である。

分類法の実際は、この分類表に従って、図書資料を書架上どこに並べるかを定める技法であると言える。それは、作業的にみれば、本の内容を分析し、それで得た主題が、分類表にあらかじめ定められている体系のどこに位置するかを調べ、さらに、同じ主題の本がすでにどの程度そこに集められているかも調べた上で、体系上の序列をあらわす記号、あるいは番号をその本に与えることで

ある。この技法は、本そのものを書架上どこに並べるかを定める技法であるので、われわれは書架分類とも呼んでいる。

書架分類法によって、図書資料の外味がなんとかまとめられる。「なんとかまとめられる」と言うのは、本の外味をまとめる場合、次のような問題がしばしば起るからである。たとえば、ここに「Judaism and Christian beginnings (by S. Sandmel, Oxford University Press, 1978)」と言う本がある。この本の内容は、捕囚期以降のユダヤ教の歴史と、キリスト教の起源、さらに標題には表わされていないが新約聖書の解釈の問題も含まれている。この本の分類を「宗教」とすることができるが、それでは仏教に関する本も、回教やヒンズー教の本も一緒に並んでしまうことになり、もしかすると、この類に本が集まり過ぎて、かえってごたごたしてしまうのではないかと言う恐れがある。そこで、分類区分をもう少し限定して、ユダヤ教の本はユダヤ教の類に、キリスト教の本はキリスト教に類別することが考えられる。こうした場合、この本は、ユダヤ教に類別される内容とキリスト教に類別される内容と二つの内容を同時に持つことになる。しかし、この本は物理的には一冊の本であり、二つの別々の区分に分類することはできない。そこでどうするかと言うと、普通は、これらのいずれかの内容を書架分類区分として、本そのものは、その内容をもった他の本と一緒にする。この本の場合、そのかなりの部分をユダヤ教の歴史を論じているので、この本は他のユダヤ教関係の本と一緒に書架上に並べることにする。しかし、それだけで済ませてしまうと、この本は、書架上ユダヤ教の本と位置付けられてしまい、キリスト教の内容は数多くの蔵書の中に埋没してしまうことになる。それでは不都合である。これをどうするかと言う問題が書架分類の技法から派生する。

この問題は、結局は、本の外味と内味と言うことからでてくるものであるが、図書資料をまとめ、それらの中から特定の一冊のものを探す手掛を作る場合、本そのものの並べ方だけでは、資料組織の目的は果せないことを示すものである。こ

こから第二の技法が必要になる。この技法は、いわゆる「目録をとる」と言われる作業に必要なものである。「目録をとる」とは、一冊一冊の本について記述することである。現在われわれは、カードを使って本の記述をしている。その記述のあり方は、カードに書かれている事項を読めば、本そのものが彷彿としてくるようなものでなければならない。そのように作られた目録カードは、本そのものに対して、その代替品になり得る。代替品は、本そのものが備えている属性も備えているものであるから、われわれは、この代替品である目録カードを使って、本そのものだけではまとめ切れなかった部分をまとめる工夫をすることができるようになる。そして、その工夫を通じて、われわれは、資料組織の本来の目的を果す技法を展開することになる。これを記述目録法と呼んでいる。

記述目録法では、せいぜい300字ぐらいのスペースしかないカードに、一冊一冊の本のことを記述するわけであるから、当然記述上の合理化、つまり、簡略化が必要となる。こうしたことが一つの条件となって、本の代替品としての本来の意味を損わないで目録カードを作るために標準的な表記法が必要となってくる。これが目録規則の一つの重要な役割である。したがって、作業的にみれば、「目録をとる」ことは、この目録規則に従ってカード上に本そのものについて記述することになる。

記述目録の目的は、本の内味を外味から分離することである。利用者は、分離された内味の記述を手掛として本を探すことになるから、われわれは、分離すると同時に、本そのものとその代替品の間に一対一の関連を付けておかなければならない。この点で資料組織法の第三の技法が必要となる。われわれは、これを請求記号法と言っている。請求記号法は、本の背下に貼付されているラベルに記されている記号、それはカード左上隅に記されている記号でもあるが、それを決めるためのものである。この記号は書架分類法によって決められた本の書架上の位置と密接な関係にある。普通は、書架分類の分類番号が中心データとな



り、その他のデータを加えて請求記号を構成する。

記述目録法と請求記号法によって作られた1枚の目録カードを基にして、現在では、複写機によって何枚でも同じカードが作られる。われわれは、その何枚かのカードを使って、本を書架上並べるだけでは十分に果せなかったまとめ方を総合的にまとめる方法を工夫する。この方法が第四の技法である。これを目録編成法と言う。それは、利用者が本を探すために使うカード目録をどう構成し、カードをどうファイルするかを決めるための技法である。

利用者のためにどんな種類の目録ファイルを準備しておくかは、本来、利用者の検索様態に基づいて考えられるべきである。しかし、この点については、目録の機能に関する一般原則によって目録ファイルを編成している。その原則とは、

1. 利用者が一冊の図書を探す場合、著者、書名、主題のいずれか一つを知っていればその図書が探せるものでなければならない。
2. 目録は、特定の著者、特定の主題、特定の形式または形態の図書がどのくらい所蔵されていて、さらにその中にどんな図書が含まれているかを利用者に知らせることができるものでなければならない。

である。これは、チャールス・A・カッターが、1876年に確立したものであるが、現代目録編成法は、この原則に基づいて工夫されている<sup>1)</sup>。

複写された目録カードは、この原則に基づいてあらかじめ設置されている著者名目録、書名目録、主題目録（分類目録の他に件名目録と辞書体目録とがあるが、これらについては後述する）にファイルされる。そのためにはカードに適切なファイリング・ワードが記載される必要がある。このファイリング・ワードは、利用者にとっては本へのアクセス・ポイントになるインデックス・ワード、あるいは標目となる。何を標目とするか、それをどんな形で表記するかは、目録編成上きわめて重要であるが、それらについては、著者名や書名が標目となる場合には、先述した目録規則に従って決められる。たとえば、J. Butler, R. I. Rotberg,

J. Adamsの三人の共著による「The Black homeland of Southern Africa」と言う本の場合、一枚のカードの標目として三人の名前を同時に記載することはできない。したがって、一人づつ別別のカードに記載することになる。またJ. Adamsそのままの形で標目としてよいかどうかも問題である。J. Adamsなどと言う名前はごく普通のありふれたものである。J. は Jeremy か John か分らない。したがって、J. Adamsの形で標目をカードに記入すると、もしかすると別のJ. Adamsの著作のカードと一緒に並べられてしまうかもしれない。それでは大変紛らわしいことになる。こうした問題も目録規則に従って記述目録の段階で処理される。

主題から本を探す場合、分類目録と件名目録がある。分類目録は、先に挙げた「Judaism and Christian beginnings」の本の場合のように、ユダヤ教の本として書架上並べれば、キリスト教の本としての存在が失われてしまう問題をなくするために、二枚の目録カードを使い、ユダヤ教にも、キリスト教にも分類して、それぞれの分類番号や記号をカードに記載して、その番号順にファイルする。こうして、一冊の本が二つ以上の主題を持っていても、その本のそれぞれの主題から探すことができるようになるわけである。このようなカードを使って分類するやり方を書誌分類法と言っているが、この技法を使うためには、たとえば日本十進分類表(NDC)などの分類表が必要となる。

書誌分類法の他にもう一つのタイプの主題目録を作る技法がある。これを件名目録法と言い、件名標目、つまり、主題を表わす言葉から本を探ることができる件名目録を作る方法である。現在三田情報センターでは、書誌分類法により主題目録を作っており、件名目録は作っていない。

こうした経過で、目録カードに著者名、書名などの標目や分類番号（または記号）が記載されると、それぞれのカードは、それぞれの目録にファイルされ、最終的に図書資料のまとめが完了する。そして、利用者には、蔵書の中から特定の一冊を探す手掛が準備される。

少々長い説明になってしまったが、これが資料組織法の全容である。われわれは、こうした技法に基づき、場合によっては、さらに詳細な技法を駆使して現在の目録を作っている。

#### ◇目録の問題と今後の課題

昭和45年4月三田情報センターが発足した。それまで慶應義塾図書館が行っていたサービスとその運営は、三田研究室が行っていたサービスとその運営と整理統合されることになった。発足して若干の年月を統合化のための調整に費したが、徐々に一つの図書館としての体裁が整えられた。当初は、それまでの状況から、一つの組織とみられなかった三田情報センターも、今では、一つの図書館運営体が、学生に対するサービス、教員に対するサービス、学問・研究に対する一般的サービスを適宜スペシフィックに、時に総合的に実施しているとみられるようになった。

資料組織についても、昭和45年以降新しい技法が採用され、事務手続も整備された。しかし、それは表面的なところで止ってしまい、資料組織の根本に立ち入った体制を確立するには到らなかった。本来、資料組織は、一つの図書館運営体にあつては一つの終始一貫した方針に基づいて行われるのでなければ、最も合理的で、効果的な資料検索手段を作るとはむずかしい。しかし、当初において、そのような基盤を確立することができなかった。それには、止むを得ない事情があつたし、また不可避的な条件もあつたが、今日三田情報センターの目録がもっている幾つかの重大な問題は、このことに由来している。

基本的な問題の一つは、図書館蔵書の分類法と研究室図書分類の不統一である。この点について、センター発足時点での決定は、図書館図書はそれまで通りNDC分類による、研究室図書は各学部（文学部においては各専攻）の独自分類によるとされた。このことから、資料組織の事務が二つに分割されることになり、また、研究室図書の分類目録が作れないことになった。

目録編成上の問題点もあつた。その一つはそれまで研究室には分類目録がなかったことであり、

もう一つは、図書館に洋書書名目録がなかったことである。図書館・研究室の統合を基本方針とした三田情報センター計画では、著者、書名、分類目録の作成についても、図書館・研究室図書をそれぞれ一本にインター・ファイルする必要があつたが、それが可能であつたのは、著者名目録だけであつた。

センター発足の背景にあつた理念では、購入時点での予算勘定区分にかかわらず、特定の主題の図書は書庫の中では同一フロア、書架上もまとめて並べられ、利用者がブラウジングし易い状態にしておくことが必要であつた。また、本そのものを並べるやり方だけでは不十分である、他の検索にも応じられるように、先述のカッターの原則通りの目録が準備されていなければならなかつた。こう言う状態を作ることが三田情報センターの仕事であつたが、発足以来10年たった今それは完遂されていない。

三田情報センター目録の課題の一つはこの点にある。すなわち、図書館・研究室の蔵書の区別なく、著者、書名、主題から検索できる目録を完成することである。先述した三田情報センター協議会における新図書館計画に関連し、センターは、この課題の解決策として次のような考えであることを提案した。すなわち、分類法の統一に関しては、新規に受入れる図書を、でき得れば研究室図書も図書館図書と同様NDCで書架分類し、将来の利用に効果的な状況を作る準備を始めたい。また、それができない場合でも、最低限度、NDCによる書誌分類を是非とも実施する。それによって、これまでできなかった三田情報センター全蔵書の分類目録作成の準備を始めたい。また合せて、これまで作れなかつた研究室・図書館図書の和漢・洋書の合同書名目録も作成したい。以上である。

目録に関する課題は、センター発足の昭和45年以降の新しい状況の中からも発生している。この10年に蔵書は急速に増加し、発足当初70万冊であつたものが、昭和54年度末には100万冊を超えることになった。その結果カード目録が膨らみ、現在では、利用者のための閲覧目録だけでも200万

枚のカードを収容している。カード目録ボックスは、センター施設のあちこちに散在することになり、これ以上の増設のためには、閲覧スペースを削る以外にないところまでになっている。もっともこの状態はあと1年で改善される。新図書館が開始されれば、凡そ350万枚の目録カードが収容できる目録ホールが作られることになっている。しかし、それだけの容量のスペースが用意されても、現在のペースで蔵書が増加すれば、そのスペースを最大限に利用しても凡そ15年で満杯になってしまうことが予想される。こうしたことから目録についての別の新しい問題が発生する。

三田情報センターでは、現在、年間凡そ12万枚の目録カードを作っている。この量のカードを各種の目録にファイルする作業量は大変なものである。全体で20万枚ぐらいの目録に毎年2万枚ぐらいの増加カードをファイルする作業量は実に些少である。だが200万枚もの目録に毎年12万のカードをファイルする場合には、割合からみれば前のケースの10%以下だが、作業量は、20倍以上となる。しかも、その増加率は年々高くなってゆく。その結果この作業の滞りが増え、利用に不都合な状況が出現することになる。

目録のためのスペースが増えることも、目録を維持する作業量が増えることも、結局は、図書館の成長が基盤にあるからであるが、図書館の成長、とくに、蔵書の内容の充実と関連して、目録にもう一つの新しい問題が発生しつつある。

図書館では、図書資料を利用者に提供するためにそれらをまとめている。まとめると言うことは、結局は、ある一つの形に固定化することにもなる。したがって、その形は、常にスタティックなものであり、新しい変化に即応することができにくい。その形を設定する場合、図書館は一応検索の基本的原理を利用動向から導き出して、それに応じて設定される。しかし、利用の動向は常に一定ではない。かつて学問・研究は、たとえば、昨年暮れの慶應国際シンポジウムのようなアプローチではなかった、一つのディシプリンで一つの対象を究明することを目標としていた。図書の分類表を作成するにあたって、学問のこのやり方に

基づいて作られていた。しかし、今日、学問の方法として、学際的なやり方も採られるとすれば、そうした変化につれて、図書の分類のあり方も変らなければならない筈である。しかし、こうした観点を考えることがないままに設定された分類表を使って、本をまとめてきたこれまでのやり方、その結果で上がった今のまとまりの形は、別のみかたからすれば、頑強に新しい利用の要求を拒む恐れがある。個人文庫のように数少ない蔵書量であれば、新しい利用形態に合わせて本をまとめ直すことができる。しかし100万冊の蔵書を、新しい分類表を設定した上で、全部やり直すことは不可能であろう。その作業量からみても、ぼう大な経費と時間が掛る。また、全部やり直すまでに、利用の動向はどんどん変化してゆくに違いないからである。

この問題は、資料組織法がもつ最も本質的な問題である。この問題を完全に解決する方法は今のところ確立していない。図書館・情報学が発達し、図書館サービスとその運営の向上に貢献している。しかし、この学問に基づいた専門的研究においても、この問題を完全に解決する方法は今のところ確立していない。こうした困難な問題をどう対処するかも新しい課題の一つである。

これらの新しい課題について三田情報センターは、コンピュータを使って目録を作ることによって解決すべきではないかと考えている。コンピュータ・カタログを作れば、目録スペースの問題と目録維持の問題は解決できる。利用のダイナミックな要求についても、コンピュータ・カタログは、カード目録のスタティックな形からくる頑固さを幾分少くできるのではないかと期待される。コンピュータを使って目録を作る場合でも、図書資料を一定の形にまとめることに変りはないから、資料組織法のもつ本質的な問題を根本に解決することにならないかもしれない。だが、コンピュータは、人間のする作業を自動的に、しかも人間よりずっと早くできるという特性をもっている。われわれがこの特性を資料組織の目的に合せてうまく活用し、新しい技法を開発すれば、コンピュータ・カタログは、ダイナミックな利用の要

求に対し、カード目録よりは早く、しかも容易に対応できるのではないだろうか、と考えている。

#### ◇目録の将来

三田情報センターにおける将来の目録は、コンピュータ・カタログを無視しては考えられない。目録作成の基本にある資料組織のありかたは、カード目録であれ、コンピュータ・カタログであれ変わらない。技法上の違いはあっても、技法の原理も変わらない筈である。しかし、目録の様態は著しく変化する。

現在コンピュータを活用して作られている目録には、冊子体目録、マイクロ・フィッシュ目録、オンライン目録の三つの形態がある。前の二つのものは、利用の観点からみればカード目録と原理的には変わらない。冊子体にしろ、マイクロ・フィッシュにしろ、いずれかを採れば、目録の管理的側面での問題は解決される。しかし、資料組織の本質的問題は、それらでは解決できない。これらの形の目録は、コンピュータ装置の経済性を考えた一種の便法である。オンライン型にすると数多くの端末機が必要になる。目録作業用の端末機、閲覧用の端末機から同時的に使用するためには、それだけ大きなコンピュータが必要になる。大きなコンピュータは、それだけ多くの費用が掛る。したがって、オンライン型目録は事務用に使用し、閲覧用には冊子型か、マイクロ・フィッシュ型の目録を使い、と言うのがこの便法のねらいである。

これらの形態の目録は、目録作成と維持の管理的な問題は解消できるが、利用者にとっては、面倒な問題が起る。たとえば、1970年から1979年まで整理したものが冊子体目録で何分冊かに分けられて、一本のアルファベットのリストであるとする。1980年に整理されたものは、目録データベースでは、それ以前に整理されたものと一緒になっているが、利用者用には、また別の分冊、たとえば1980年9月整理分の補遺として作られることになる。つまり、冊子体目録では、最新の目録情報をアップ・トゥ・デートに提供するとすれば、補遺版の形で出さざるを得ないわけであるから、利用者は、最新のものから逆に幾冊かの補遺と、本

体の目録を検索しなければならなくなるわけである。マイクロ・フィッシュ型の目録の場合でも、これと同様の不都合が起るが、さらに、不便なことに、マイクロ・フィルム・リーダーに掛けないと目録情報が得られないことである。

したがって、三田情報センターの将来の目録は、オンライン型であるべきで、仮りに冊子型やマイクロ・フィッシュ型を作らざるを得ないことになっても、それは、オンライン型の過渡的な形態と考えるべきであろう。

コンピュータ・カタログが始まったのは、1960年代の後半からである。まず、米国議会図書館が、Machine Readable Cataloging という計画を開始した。その後、この動きは、米国やカナダの大学図書館に伝わり、多くの大学でコンピュータ・カタログへの移行が検討されることになった。その間、Ohio College Library Center という機関が、米国各地の大学のために巨大なコンピュータ・カタログを土台としたネット・ワーク・システムを作りあげ、参加各館にサービスを開始することになった。

こうした動向の背景には、米国の大学図書館でカード目録が目録本来のはたらきを失くなり始めたと言うケースが多くなり、それに対し、アメリカのライブラリアンが危惧の念を強くし始めたことがある。それについてすでに数々の調査や研究がなされているが<sup>2)</sup>、手許にある資料からその事情について引用してみたい<sup>3)</sup>。

カリフォルニア大学バークレイ図書館のカード目録が作られてから100年たった。現在では凡そ800万枚のカードが収容されている。この目録は、長いことかかって作られ、維持されてきたこともあって、その時代その時代の目録作成方針、資料組織技法、作業手続などによって作られたいろいろな形の目録カードが並べられている。多くの場合、古い時代のものは、もう時代遅れのものになってしまっている。したがって、目録の内味は、大変雑然としており、目録そのものの大きさとも関連して、利用者にとっては勿論のこと、図書館員にとっても使い難いものとなっている。

こうした状況の下で、さらに、先述したカード目録の管理面での問題が浮上しているわけである。たとえば、コーネル大学図書館では、1975年現在、1,520万枚のカード目録があり、年間17.5名の人員で13万6千ドル(約3,400万円)もの経費を、カードのファイリングだけの作業に掛けている<sup>4)</sup>。コンピュータ・カタログにすれば、こうした作業は機械処理の中に含まれてしまい、この作業だけにこれだけの巨額な出費は省かれる。

それだけでなく、カード目録作成の作業工程の少くとも1/3のステップが省力化できる。カード目録作成の工程は、大まかに次の六つのプロセスに分けられる。それらは、

- a. 図書資料の書誌データと主題分析
- b. 目録情報構成データの決定
- c. 目録情報の記述
- d. 目録編成ストラテジーの決定
- e. 各種目録カードの作成
- f. 目録編成作業

である。コンピュータ・カタログ作成の作業工程では、eとfは完全に省かれる。

コンピュータ・カタログ化を考えている米国ライブラリアンは、まず以上のような省力化を重視している。しかし、それだけではなく、別の意味でのコンピュータ・カタログの可能性に着目していることも指摘しなければならない。たとえば、先に挙げた Ohio College Library Center のネット・ワーク・システムを考えてみると、それは、米国中の数多くの図書館の蔵書が記録されている巨大なコンピュータ・カタログである。勿論、重複しているものも多いに違いないが、それでもそれは、世界中のただ一つの巨大な図書館よりも豊富な内容をもった目録となる可能性が高い。とすれば、そのサービスを受けている各大学の利用者は、その目録を使うことによって、自分の大学の図書館以外の蔵書内容を知ることができるし、また、米国ではごく普通に行われているインター・ライブラリー・ローンで実際に他の図書館の本を借り出すことも可能である。米国において実現しつつあるこのシチュエーションこそ、学問研究のために本を利用する人たちの最も望むものである

う。それを実現することが、ライブラリアンの目標である筈である。われわれは、この目標を達成するためにビブリオグラフィック・コントロールと言う状況を作ることを目的としているが、コンピュータ・カタログの別の意味での可能性とは、結局、それがこの目的にとって不可欠の手段として考えられていることに他ならない。

さて、コンピュータ・カタログのこうした利点を最大に活用できるオンライン目録を作ることが、三田に限らず、全塾情報センターでの今後の最も重要な課題の一つである。しかし、これまでのところ、われわれは、それを実現するために必要な条件を十分に備えていない。コンピュータ・カタログを必要とする三田情報センターの差し迫った事情は先に述べた通りである。コンピュータ・カタログを利用者に提供するためには、目録データの蓄積だけでもかなりの時間が必要である。したがって、われわれは、できるだけ早い機会に、そのための準備を開始しなければならないと考える。

- 1) Charles Ammi Cutter; *Library systematizer*, edited by Francis L. Miksa. Littleton, Colo., Libraries Unlimited, Inc. 1977. p. 198-227.
- 2) *Freezing card catalogs*; a program sponsored by the Association of Research Libraries, May 5, 1978, Nashville, Tennessee. Washington, D. C., Association of Research Libraries, 1978. 83 p. *Requiem for the card catalog; management issues in automated cataloging*, edited by D. Gore, J. Kimbrough and P. Spyers-Duran. Westport, Conn., Greenwood Press, 1979. 200 p. *The nature and future of the catalog*; proceedings of the ALA's Information Science and Automation Division's 1975 and 1977 Institutes on the Catalog, edited by Maurice J. Freedman and S. Michael Malinconico. Phoenix, Oryx Press, 1979. 317 p.
- 3) University of California Libraries. *A plan for development, 1978-1988*. Berkeley, University of California, 1977. 224 p.
- 4) *Planning for the future of the card catalog*. Washington, D. C. Association of Research Libraries, 1978. 171 p. (Association of Research Libraries SPEC kit no. 46)

## 年次統計要覧 &lt;昭和54年度&gt;

慶應義塾大学研究・教育情報センター

## I. 図書費 &lt;54年度実績及び55年度予算&gt;

内訳 支部センター	54年度実績 <単位:円>			55年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	336,020,010	1,669,941	337,689,951	406,618	1,856	408,474
図書館	178,245,217	1,669,941	179,915,158	220,375	1,856	222,231
研究室*	157,774,793	—	157,774,793	186,243	—	186,243
(私大研究設備相当額)	(15,400,000)	—	* *			
日吉情報センター	73,695,258	1,440,730	75,135,988	90,928	1,540	92,468
図書館	28,756,810	1,440,730	30,197,540	37,000	1,540	38,540
研究室*	44,938,448	—	44,938,448	53,928	—	53,928
(私大研究設備相当額)	(5,300,000)	—	* *			
医学情報センター	72,111,918	1,881,616	73,993,534	83,730	1,959	85,689
"	69,331,508	1,881,616	71,213,124	83,730	1,959	85,689
指定寄付金	2,780,410	—	2,780,410			
理工学情報センター	60,352,552	958,040	61,310,592	71,290	1,054	72,344
"	59,071,747	958,040	60,029,787	71,290	1,054	72,344
指定寄付金	1,280,805	—	1,280,805			
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	* *			
(理工学部新設用)				(44,600)		* *
合  計	542,179,738	5,950,327	548,130,065	652,566	6,409	658,975

注) \* 特別図書費は含まず。

\*\* ( ) 内は合計欄に加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当てしたものを。

本部の図書費は三田情報センター・図書館に含める。

Ⅱ-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター	内 訳	単 行 本			製 本 雑 誌			合 計	
		和	洋	計	和	洋	計		
年 間 受 入 冊 数	三田情報センター	15,941	23,331	39,272	4,918	6,269	11,187	50,459	
	図 書 館	(8,450)	(10,870)	(19,320)	(2,565)	(2,292)	(4,857)	(24,177)	
	研 究 室	(7,491)	(12,461)	(19,952)	(2,353)	(3,977)	(6,330)	(26,282)	
	日吉情報センター	9,478	4,045	13,523	1,020	1,150	2,170	15,693	
	図 書 館	(7,486)	(903)	(8,389)	(916)	(25)	(941)	(9,330)	
	研 究 室	(1,992)	(3,142)	(5,134)	(104)	(1,125)	(1,229)	(6,363)	
	医学情報センター	1,693	1,523	3,216	1,114	2,118	3,232	6,448	
	理工学情報センター	1,808	1,037	2,845	1,248	3,032	4,280	7,125	
	合 計	28,920	29,936	58,856	8,300	12,569	20,869	79,725	
	所 蔵 冊 数 (累 計)	三田情報センター	437,609	376,010	813,619	106,900	85,641	192,541	1,006,160
		図 書 館	(328,911)	(223,371)	(552,282)	(59,192)	(39,790)	(98,982)	(651,264)
		研 究 室	(108,698)	(152,639)	(261,337)	(47,708)	(45,851)	(93,559)	(354,896)
日吉情報センター		135,126	71,655	206,781	14,204	19,645	33,849	240,630	
図 書 館		(93,047)	(8,199)	(101,246)	(9,435)	(156)	(9,591)	(110,837)	
研 究 室		(42,079)	(63,456)	(105,535)	(4,769)	(19,489)	(24,258)	(129,793)	
医学情報センター		18,251	20,911	39,162	34,470	65,328	99,798	138,960	
理工学情報センター		24,293	12,862	37,155	27,442	63,613	91,055	128,210	
合 計		615,279	481,438	1,096,717	183,016	234,227	417,243	1,513,960	

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの  
 2) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 研究室	4,306 (1,611) (2,695)	2,319 (619) (1,700)	6,625 (2,230) (4,395)	4,764 (2,938) (1,826)	1,834 (1,013) (821)	6,598 (3,951) (2,647)	13,223 (6,181) (7,042)
日吉情報センター 図書館 研究室	537 (371) (166)	478 (11) (467)	1,015 (382) (633)	188 (101) (87)	405 (2) (403)	593 (103) (490)	1,608 (485) (1,123)
医学情報センター	1,056	1,244	2,300	617	971	1,588	3,888
理工学情報センター	961	1,081	2,042	1,208	1,899	3,107	5,149
合計	6,860	5,122	11,982	6,777	5,109	11,886	23,868

注) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科を含む。

Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	(計)	一般図書	貴重書	
三田情報センター 図書館 研究室	10,008 (5,781) (4,227)	58,306 (55,525) (2,781)	68,314 (61,306) (7,008)	— 83,880 *	1,005 1,005 —	1.02 1.02 1.00
日吉情報センター 図書館 研究室	3,453 (1,242) (2,211)	38,711 (38,711) —	42,164 (39,953) (2,211)	* * *	— — —	1.10 1.09 1.33
医学情報センター	—	—	35,316	*	—	1.07
理工学情報センター	—	—	17,127	*	—	1.00

\* 開架のため実数不明

Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	653	6	659	280	186	466	1,125
日吉情報センター	129	0	129	159	1	160	289
医学情報センター	11,319	82	11,401	2,376	96	2,472	13,873
理工学情報センター	27,240	0	27,240	1,089	116	1,205	28,445
合計	39,341	88	39,429	3,904	399	4,303	43,732



### Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	M F	34	10,390	4	734	38	11,124
	ゼロックス	18,346	412,457	979	39,791	19,325	452,248
	リコピー	193	45,419	—	—	193	45,419
	オフセット	271	201,798	—	—	271	201,798
	P P C	—	—	—	—	—	420,223
日吉情報センター	ゼロックス	7,390	58,211	—	—	7,390	58,211
	P P C	—	251,583	—	—	—	251,583
	電子リコピー	59	1,211	—	—	59	1,211
医学情報センター	M F	—	—	—	—	—	6,390
	ゼロックス	51,675	396,310	26,751	170,917	78,426	567,227
理工学情報センター	ゼロックス	20,849	289,675	27,909	282,532	48,758	572,207

注) P P Cはコイン方式のため内訳は不明

### Ⅲ-4 利用統計 <レファレンスサービス>

利用者別

内 訳 支部センター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田情報センター	1,236	7,440	2,606	11,282
日吉情報センター	447	1,700	140	2,287
医学情報センター	—	—	—	4,770
理工学情報センター	389	2,430	675	3,494
合 計	—	—	—	21,833

業務内容別

内 訳 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田情報センター	3,408	774	7,094	6	11,282
日吉情報センター	586	290	1,357	54	2,287
医学情報センター	1,041	90	158	3,481	4,770
理工学情報センター	—	—	—	—	3,494
合 計	—	—	—	—	21,833

研究・教育情報センターは昭和55年の今年、設立10年目を迎えました。昭和45年にそれまでの図書館組織に代って新しく登場してからちょうど10年が経過したわけです。といっても新組織への移行は全塾一斉に行われたわけではありません。昭和45年には先ず本部が新設され、三田情報センターが発足いたしました。次で翌46年に医学情報センターが、続いて47年に日吉と理工学の情報センターとが順次発足するという具合に組織替えは漸進的に行われたわけです。その意味では、今年正確に10年目を迎えたのは本部と三田だけということになりましょう。

この10年で新組織は着実に成長する一方で、それを立案し、実行し、育んだ人間の顔は次々に変っていきました。昭和45年度の「役員・教職員録」に登場する顔ぶれと現在のそれとを比較すると次のような事実が明らかになります。①同一のセンターに引き続き在籍している専任者の数は、本部・三田で67名中13名、日吉では21名中2名(当時の研究室職員を含む)、医学では24名中5名、理工学では15名中ゼロ、合計では127名中20名、②異動によって他のセンターのどこかに転出し、今も在籍する専任者の数は127名中10名。

以上から、この10年間の流れを同一のセンターにおいて一貫して体験し得た者は全体のわずか16%に過ぎず、異動した者の数を含めても、その割合は24%となるに過ぎないということがわかります。換言すれば、現在の職員の4人に3人までが情報センター設立のいきさつを直接には知らないわけで、10年とはまさに一昔とってよいでしょう。

ここでセンター10年の歩みを総括し、その目的を再確認し、成果を吟味することは、次の10年を考える上でどうしても必要なことであります。今号では、そのような観点から数少ない流れの体験者であり、当事者でもある高鳥所長と安西三田副所長とにそれぞれ執筆をお願いしました。編集者としては、これらの文章の行間から先人の意志、

創意、労苦などを読み取り、情報センター職員としての共通の認識の培養に役立てるよう、特に最近就職したヤングに願っておきたいと思います。

この10年間、絶え間なく人が変わったという事実は、情報センターに進取の気風を育み、新しく良いものを取り入れようとする積極性を定着させた反面、一貫性がその本質であるような業務、例えば目録作成作業などには明らかにマイナスの影響を与えたことは否定できません。このような状況の中で新図書館の開館をほぼ1年半後に控え、100万冊を越えるコレクションの再配置に取り組みながら三田におけるビブリオグラフィック・コントロールのあり方を模索したのが渋川整理課長の「目録の将来」です。情報センターのシステムは、管理組織の一元化という面で顕著な成果を収め得たとはいうものの、その構成要素である図書館相互の、三田でいえば慶應義塾図書館と研究室図書機能との有機的な結合という面での実質的な成果は、なおこれからの施策に負うところが大きいと言わなければなりません。その施策の第一番目が目録の整備にあるのは当然であり、その整備のためには研究用図書の選択者であり、利用者である教員の協力が絶対に不可欠であります。そしてその協力は、今の三田が抱えている問題点に対する正確な認識、分類や目録の機能に対する正しい理解、ビブリオグラフィック・コントロールに関する将来の展望などを利用者である教員とプランナーである情報センターとが共通の次元において持つことが前提となって初めて実りあるものが期待されるといってよいでしょう。「目録の将来」はそのような願望をポイントの一つとして執筆されています。新図書館計画の大きな意義は、施設の改善もさることながら、これを契機に三田の蔵書構成やビブリオグラフィック・コントロールのあり方を根本から見直してみようという、困難でも避けては通れないテーマに正面から取り組む機会を提供したことにあるといっても過言ではないでしょう。(中島)

編集委員\*情報センター本部 渋川雅俊 中島紘一\*三田情報センター 酒井明夫\*日吉情報センター 関 洋\*医学情報センター 並木和子\*理工学情報センター 中村久子\*